



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

NO.13号 平成15年3月31日

発行 日本山岳会熊本支部

熊本市二本木3丁目3-8(田上方)

☎(096)324-1200

印刷 秀英印刷

目次

支部長随想……………1	特別寄稿「ポカルカン初登頂」20
追悼文……………2	会員近況……………44
会員随想……………6	会務報告……………47

名誉会員 奥野正亥様ご逝去を悼む

8190 支部長 工藤 文昭

昨年9月6日、私達は山の大先輩、日本山岳会名誉会員であった奥野正亥様を亡くしました。奥野先輩は1933年、朝鮮山岳会に入会され、主に北朝鮮の金剛山をはじめ中国国境近くの多くの山々の困難な岸壁ルートの開拓や、厳冬期の数々のパイオニアワークなど目覚ましい記録を残されました。1940年、日本山岳会に入会され、会員番号1818は現在6000人近くの会員の中で7番目の長老会員でもありました。JAC62年間の在籍、朝鮮時代から累積しますと実に70年を越える息の永い登山を続けてこられました。先日、熊本市内のデパートで開催されました「岩橋崇至山岳写真展」で北朝鮮の山が数点紹介されていましたが、厳しさや美しさや臨場感あふれる岩橋氏の写真に対峙していると、奥野先輩の姿が彷彿されて来ました。先輩が青春の燃え盛る炎を燃やし続けられた北朝鮮の山が十分理解できました。私は奥野先輩と山を歩く機会はありませんでしたが、会合等で接した奥野先輩の印象は、いつも穏やかに優しく話しかけていただく中か、心の温かさを感じました。J・フランコは「山は根気強い勤勉さと沈着と、頑張りの学校だ」という言葉を残していますが、奥野先輩も、登山は人格形成の場と考えられ、登山から自分の生き方を学ばれ、そこで得た「生きる力」を裏付けに、心身ともに力強く、余裕を持って全てに対処しておられる様でした。現在、第2の登山ブームといわれ、中高年者の登山が隆盛を極めておりますが、その殆どは健康志向の登山で、精神的な面はいくらか薄らいでいるように思えます。人間、健康第一ですからそういう登山も立派なものですが、登山には、もっと深い学び屋があることを教えていただいたような気がします。終生、山を愛され、山への熱き思いを持ち続けられた奥野先輩の逝去は、私達にとり悲しいことですが、先輩の尊き教えを忘れることなく、いい登山を続けていかなければと思っています。合掌。

さて、来年度熊本支部が担当する全国支部懇談会は、10月2・3日に開催することが決定しました。9月の残暑、10月の観光シーズンを考えると最適な日程で

はないでしょうか。既に準備会も活動開始、計画を立てながら、会員の皆様に原案を提示、検討を重ねながら、会の成功を目指して、支部をあげて準備を進めていきます。皆様のご協力をお願いします。

追悼
名誉会員
奥野正亥氏
1911-2002
5421 本田誠也

平成14年9月6日、かねて病氣療養中だった名誉会員の奥野正亥さんが亡くなられた。90才のご長寿ではあったが、あの温容に再び接することが出来ないと思うと限りなく寂しい。奥野さんの登山歴は、昭和60年11月に発行された熊本支部設立30周年記念誌に、「愛しき山々」と題して詳しく述べられている。普段、話をされる時と同じ飾りのない、それでいて

味わい深い文章で、私は何度も読み返したものである。このほか、熊本支部報第3号(平成4年3月)「思い出の冠帽連山」。第4号(平成5年3月)「渡正山から冠帽主峰へ」。第7号(平成8年3月)「名誉会員になって」などがある。登山記録の集大成は、飯山達雄編、図書刊行会発行「北朝鮮の山」である。この中で厳冬の胞胎山縦走、冬の冠帽連山縦走、および金剛山の岩場など北朝鮮の山々での数々のパイオニアワークの記録が収められている。いずれも30代前後の躍動期の記録であるが、地の利、時の利があったとは云え、山への深い愛情と烈しい情熱に感動する。以上の記録や、生前の折々に奥野さんから伺った話をもとに次の年譜を作成した。

(奥野正亥氏登山年譜)

1933(昭和4年)9月22日 京城市(ソウル)で出生。

中学1年の時、北漢山(836m)に登る。北漢山、道徳山、仁壽峰などで岩登りに関する。

1933(昭和8年)(22歳) 朝鮮山岳会に入会する。

1934-1939 (23歳~28歳) 金剛山の岩場開拓(集仙峰から世帯峰へ。集仙峰ルートの開拓)

1936(昭和11年)(25歳) 厳冬の民幕谷から冠帽連山縦走。

1937(昭和12年)(26歳) 金剛山協会に入会する。

1938(昭和13年)(27歳) 北漢山霧積峰西壁初登。白馬岳、乗鞍岳冬季登山。

1939(昭和14年)(28歳) 集仙小屋建設。厳冬の渡正山から冠帽主峰縦走。

1940(昭和15年)(29歳) 西岡一雄氏の勧めにより日本山岳会に入会する。(会誌1818)
赴戦高原、北白水山(2523m) 厳冬の北胞胎山より將軍峰。

1941(昭和16年)(30歳) 結婚。

1942(昭和17年)(31歳) 台湾 新高山(玉山)、次高山(雪山)登山。

1943-1946(昭和18年~21年)(32歳) 応召、工兵隊として中国戦線へ。

1948 (昭和21) (34歳) 敗戦により下関市に復員。3年後、職(西日本通信建設)のため熊本に移居。

1988-1992 (昭和63~平成4年) (77歳~81歳) 日本山岳会熊本支部長となる。

1990 (平成2年) (78歳) 永年会員となる。*日本山岳会在籍50年

1995 (平成7年) (83歳) 名誉会員となる。

2002 (平成14年) 9月6日 逝去 90歳

戦後も、お仕事の合間に九州、四国の山々を足しげく登られた。九州での只一人の名誉会員として、会員の敬愛の的であった。謹んでご冥福をお祈りします。

奥野正亥さんを偲んで

4427 西沢 健一

会員番号1818、名誉会員、永年会員そして元熊本支部長、同顧問であられた故奥野正亥さんのご逝去は、突然のこと、昨年9月6日であった。享年92歳と聞いている。正しく天寿を全うされたといつてよい。私共会員にとって、又熊本支部にとっても、大先輩を亡くし、心からのご冥福をお祈りする。

晩年の奥野さんは心臓を患って、いつの頃からかペースメーカーを体内に挿入して療養を続けてこられた。お会いする機会も徐々に遠のき、ご高齢の身と併せて、体調の心配は絶えず私共の胸中の一隅にあった。そんな中、支部の事務局からご容体が悪いと知らされて、昨年8月26日に益城町の入院先にお見舞いし、お声をかけたのが最後になってしまった。

告別式はご遺志により熊本大学医学部に献体されたので、後日(同年9月16日)熊本市内の健軍ルーテル教会で「お別れ会」が開かれ、日本山岳会からも支部会員多数が参列して別れを惜しんだ。

私と奥野さんとの出会いは熊本支部が発足して間もない頃(昭和33、4年頃)日本山岳会熊本支部の設立を何かで見て知ったと私の所へ来られた。聞けば戦前朝鮮山岳会に所属し、朝鮮半島の山にはよく登っていたと。日本山岳会にも朝鮮時代に入会したといわれ、会員番号はすごく若番である。職業は西日本通信建設株式会社に勤めておられた。ガッチリとした長身の体格で、一見真面目な方に見えた。以来私は当時支部の常務委員をしていたので、支部のことで助言、相談を頂くため市内九品寺にあったこの会社に度々足を運ぶことがあった。

熊本支部に入られて最初に顔を出されたのは、昭和35年(熊本県で最初に国体があった年)6月18~19日にかけて九重山法華院温泉での春期総会であった。この日は法華院温泉に一泊、奥野さんの外に特別招待者として久住町在住の日本山岳会会員工藤元平氏(1047号)を迎え、熊本支部から竹田市在住の首藤宗利会員、大牟田市在住の馬場猛会員、熊本市内在住の山代未満会員、それに私の5人が歓迎した。翌日大船山に登ったがあいにく途中から雨となり、山頂をあきらめ、段原から立中山を通り、法華院温泉へ下りたことが思い出される。(当時は会員数がや

っと20数名に達した頃で、例会も春秋2回の集まりで、行動できる人はもっといたが、この時は少なかった。)

この初回の参加以来、奥野さんは支部行事にはほとんど欠かさず参加されて、その都度長身のお姿に接し、性格は温厚な方で控え目、あまり目立たない存在であられたが、その会員の行動に多大の指導的、能動的影響を与えていただいた。特に昭和47年から同60年にかけて続いた京都の今西錦司元会長の1500山九州の山歓迎登山、又九州各支部合同の交流登山にも積極的に参加され、支部長在任中を含めて、永い間にわたり支部の発展に大きな貢献をされたことは忘れてならない。(あの頃はまだまだお元気だったのに)私は、奥野さんの前任の支部長であったが、今思えば私が先になって、これは大変僥倖なことをしたと申し訳なく思っている。

私が個人的に一番世話になったのは、例会山行時の往復車の便乗であった。車のない私には永い間にわたり、ただならぬご厚意を頂いた。どの方からもそうであったが、「どうぞ乗って下さい」との有り難いお言葉に甘えて、皆様には大変お世話になっていた。口数が比較的少ない奥野さんは、車内では会話が弾み、よく軍隊の話が出ていた。北支事変の頃のことで、輻重兵だった奥野さんの仕事はトラックの運転ばかり、色んなトラックもあったそうで困った話など。その代わりに前線に出ないので、敵さんは一人も殺していないと豪語。あとで知ったのだが、神の教えに背かない心のうちを伺うことが出来た。又、こんなことも奥野さんにとっては、密かに感服していた。それは例会時の車内でも、あれだけ同乗していた機会があったのに、ご自分の生き立ちや山歴、ひいては若い頃の朝鮮半島での山の話、数々の記録的な踏破等一切口には出されず、実に謙虚な方であった。

奥野さんの生き立ちや朝鮮半島での数々のパイオニアワークとしてクライミングの功績については、支部の本田誠也氏が本会会報「山」1月号(№692)に追悼文を寄せられているので、ご必読願いたい。その中でも言っておられるが、戦前の秘められた朝鮮半島での山々の功績、未知のルート岩場への朝鮮、特に北朝鮮の山々での活躍、多大の開拓魂、感光された長年の努力と執念の功労が今日に認められて名誉会員への推挙の要因となったのであろうと推察している。即ち、その功績は酷寒の胞胎山縦走、冠帽連山踏破、金剛山集仙峰岩場の各ルート開拓、更に集仙小屋の建設に意欲的な貢献等顕著な足跡が残されている。これらの記録は平成7年7月発行の写真集「北朝鮮の山」(編集者飯山達雄、発行図書刊行会)に奥野さんが詳しく執筆されている。

荒尾 宏先生を偲ぶ

5421 本田 誠也

平成15年2月8日朝、昨夜来から雨模様の天気だが、咲き初めた庭の白梅に目をやりながら朝刊をひろげた。年のせいか、この頃はまず訃報欄を見ることが多

い。すると県内の最高齢者、山江村の黒木ステさん108歳死亡の次に荒尾先生の訃報があった。「荒尾 宏氏=植物研究家。2月6日午後3時33分、肺炎のため荒尾市の病院で死去。94歳(幟)同市の小岱山麓で希少植物トキワマンサクの自生地を確認。調査保護にも尽力した」とあった。

生涯を通じて続けられた植物の研究は、もっとも尊敬していた牧野富太郎先生に師事し、九州はもとより全国の山野を跋渉して採集、観察、調査に当たられた。

荒尾先生は、会員番号4466番の日本山岳会員。1980年健康を損ねて退会されるまで熊本支部会員でもあった。その間20年近いおつき合いがあったと思うが飄々とした物腰と、トレードマークの山羊ひげの温顔は何時までも忘れることはない。

生前、荒尾先生は自らを小岱山麓に住む仙人になぞらえ毎年、ガリ版印刷の小誌「仙境」を出されていたが、その中に元日本山岳会長、今西錦司先生を小岱山に迎えた時の一文がある。荒尾先生の面目躍如たる文章なので次に転載する。

.....

小岱山 仙境 ……1985(昭60)夏……

2月10日、小岱山に今西錦司先生を迎える。熊本の本田誠也氏より連絡があり飯田山、筒ヶ岳、震岳をゆっくり登られる由。私77歳の低血圧を忘れて勇躍、83歳の先生を小岱山にお迎えすることにした。先生の予定時刻に合わせて小岱山中央部の天狗岩南面でお待ち申し上げると、10時過ぎ大峠(ウウタオ)の南の頭に人影が見え、折からの霧雨と寒風吹き荒ぶ中に10数名の一行を認める。思わずヤッホーと叫ぶと直ちに返ってくる。西澤健一氏や馬場猛夫妻も従っておられる。大分の加藤敦功さんのご令息がお出かけになることをご紹介いただき流石に今昔の感にうたれる。日本山岳会(会号4466)を退会してから、既に6年を経過している。今西先生の歩みには56年間の重みが伺われ、先導される方の気配りには親子のような尊敬の心が拝まれた。天狗岳を越え、鎌倉時代に掘られた二重の深い掘切を経て二の丸跡からさらに三重の掘切を越えて、小岱山最高峰の筒ヶ岳(501.4m)の1等三角点に達した。今西先生はニッコリとせられ、一同は三角点を中心に円陣を組み先生の歓呼にあわせて万歳三唱する。

先生は曇交じりの北西風を背に南座され、一同これに従い、丸いコロニーをつくる。お茶となり、京都と竹田の銘菓と魔法瓶の焼酎をいただいて私の膝頭がギリとする。当山の住人として一座のお許しを得て、歓迎の挨拶を申し上げることにした。「この小岱山は建久5年(1194年)、29歳の俊 律師が筒ヶ岳正法寺を建立せられ、日本で最初に四書を講義せられた。天正15年(1587年)豊臣秀吉は、九州平定に向かった折、小代氏に案内させて南関町から登山して正法寺に参詣したと伝えられる。1930年(昭和5年)田代善太郎は三池山、小岱山の植物を踏査。

1968年(昭和43年)、堀川芳雄は、トキワマンサク28株の自生を確認。

1985年(昭和60年)2月10日の今日、今西錦司先生の三角点踏査を迎える。まさに小岱山の吉祥日である乎」

あとで今西先生に聞いた話では、筒ヶ岳の山頂にピタリと正座してご挨拶されたそうで、「イヤー、びっくりした… 明治の人やなあ」。

なお、「仙境」には、昭和20年7月の荒尾市大空襲。昭和28年3月、病床にあった95歳の牧野富太郎先生お見舞いの記。昭和37年7月、東北の鳥海山の採取旅行では、85歳の武田久吉博士と同行するなど歴史を感じさせる記述がある。天国での荒尾先生は、もう採取などはなさらずに、好きな植物に囲まれて永久の安らぎを得てお出になることであろう。

山岳の復刻版を読んで

4943 馬場 猛

山岳会創立百周年記念に山岳の復刻版を出したとあってセールスに来た。見本は完全に復元されていない。3冊を合わせた豪華な製本、これじゃ何万も高くついて勿体ない。オリジナルだと手軽に読めるのをと不満だった。でも復刻されていないのは製本だけで、中身は雲助文法馬丁文字(注)なんかに変改されていないのは有り難い。山岳の手持ちは50号からで、初期の格調高い文章には以前から魅力があったので注文した。

昔は、これをペーパーナイフで頁を切り、優雅な一時を過ごすという楽しみもあったが、忙しい今の人間に手間がかからずこの方が良いか？実際何枚も載るのは厄介なもの。

山岳会は博物同志会が母体となって発足しただけに博物に関する記事が多く、非常に詳しいので、その方面に興味のある方は大変悦ばれるだろう。

当方、花虫鳥など全くの門外漢で初めから諦めて読みとばす許り、もう少しかじっていたらと嘆いても今更どうしようもない。

毎晩繻く聖書も口語文は気に入らず、文語体を愛用、古文についてはある程度の自信をもってしたが、読めない言葉が頻々と出てくる。字画や前後の文章から大凡の意味が解るので一向差し支えない。が読めないでは活券に係るので辞書をめくるも、手持ちのものには見当たらず、癪に障るので24,466円はたいて大事典を求めた。それにも載っていない言葉が数多くあったが、これに載っていないのなら知らぬで当たり前と却って救われた気がした。

木綿の足袋に草鞋ばき、雨具は油紙。嚮導人夫を連れての大名登山。該博な知識と格調高い文章に接し、先輩達の体力、金力、知力に改めて感嘆する許りだった。

(注)小生の尊敬する仏文学者の齋藤穢雄先生は、戦後の新仮名新文法馬丁字とあって嫌われ、頑なに旧字旧文法で著訳書が出版された。小生もその方が好き。

春の霧島山旅

10185 神谷 平吉

ここ一年来、体調万全と言えず、スタミナも低下気味の私にとって、春の連休には身近な霧島を訪ねることにした。

春の霧島は、私達夫婦にこんなに近い所にも、こんなに素晴らしい自然があるのだということをしみじみと感じさせてくれる。

花の百名山にも取上げられたクリシマズキは、可憐な萌黄色の花々をその枝に垂れ下げて、早春の韓国岳山麓に彩りを添えている。

しかし、とりわけ心に深く残る風景は、山行の間を縫って行うことが多いお池めぐりのみちみち、深い樹林帯の中に点在する広葉樹の目さめんばかりの新緑である。其処彼処に、鮮やかなミツバツツジのピンク色の花々がその緑を浮き立たせ、うきうきと鳴り響く鶯の囀りが、一際心を弾ませてくれる。

この時期、遊歩道脇に茂るスズタケは、其処彼処に可愛らしい筍を芽吹かせ始める。白紫池へ向かう緩やかな登りの両側は、深い赤松林が続いているが、昨春は、その一角にマムシグサの群生している場所があった。しかし、それは背丈も低く、みずみずしい緑が際立っている緑色花であったためか、その場の春の光景にマッチして、新鮮な風情を醸し出していた。

同じ頃、えびの高原の草原一帯には黄色いツルキジムシロの小さい花々が優しげに目に映り、霧島道路沿いの一角では、大正12年、国の天然記念物に指定されたという。ノカイドウの淡いピンクの花が咲き始める。一昨年の5月初旬、その花々はおおよそ満開に近く咲き競い、息を呑む思いであったが、昨春の同じ頃には、未だ七、八分咲きといったところであったろうか。

それにしても、野生のリンゴの仲間といわれるこの花は、世界中で唯一の所、霧島だけに見られる珍しい植物であると聞く。

心弾ませて訪ねる霧島の山々……。最高峰の韓国岳、見事な山容の高千穂の峰山頂にエメラルドグリーンの火口湖をたたえた新燃岳、白紫池を抱いて飛び立たたんばかりの白鳥山、印象的な台形の山容で六観音御池を引き立たせている甕岳。

夫々の山が、各々の個性を主張しながら、春には春の装いも新たに、私達を迎え入れてくれる。

深く暖かな霧島の自然は、今年喜寿を迎えた私、古稀を迎えた家内・・・私達二人の01dシニアにとって、心を和ませ、山旅の幸せを体感させてくれる貴重な領域の一つと言えよう。

春秋の南外輪山を訪ねて

10186 神谷 文子

この1年近く、主人も私も、少しばかり体調が思わしくない感じで、余りハード

な山行は控えていました。

そのため、アプローチも近く、余り無理のない南外輪山には、およそ11回ほど足が向きました。今ふり返ってみますと、それなりに、ささやかな喜びや、楽しみを感じる事が出来ました。

春、4月末、俵山1ピークから2ピークへ向かう草原には、淡紫色のハルリンドウが群生して、さながら花の街道の観を呈します。

5月中・下旬、地藏峠から大矢野岳へ向かうみちみち、ミヤマキリシマが咲き薫り、山グミも、可愛い花を枝いっぱいにはげます。

6月も近づく頃、俵山には、可愛いシライトソウが咲きはじめます。ハルリンドウは陰をひそめて、草原は淋しげですが、草の間をのぞきこむと、純白のこの花にハッとひきつけられます。

6月も下旬になる頃、南側の樹林帯のルートから、1ピークを越えてみました。木洩れ日のさす樹間いっぱい、清らかなヤマアジサイの花が気品をたたえて、静かに咲いていました。草原に登りつくと、ノアザミが咲き競い、所々で、ヤマブキショウマの淡いピンクの花にも出会えました。

この頃、山々には、ヤマボウシの白い花が目につき始めました。

夏には、南外輪山からしばらく遠ざかっていましたが、秋に入ると、地藏峠旧道を、下の方から何度か登ってみました。晩秋迫る頃、ススキの白い穂が、逆光に輝いて、黄色、赤色、褐色などの紅葉が、黄金色の草原の山肌をバックにして、深い秋を実感することが出来ます。

すばらしい阿蘇の自然を身近に味わうことのできる幸せをかみしめながら、今年も四季折々の南外輪山を訪ねたいと思っています。

2002年の山

9649 鶴田佐知子

2002年の私は、新年会の翌日の1月20日の鞍岳登山に始まった。県境踏査達成の祝賀の新年会に出席いただいた大塚会長が参加され、帰郷される時間の都合で駐車場から20分程の登りだったが、天気にも恵まれ、広大な展望に満足した。次いで30日、永谷さんの案内でおかまど山の南郷谷側のやせ尾根を登った。ツララのさがる寒い日でスリル満点、頂上で食事、下りは池の窪の東への楽な下りだった。

2月初め所用で京都に行ったが、早朝に着き、急に思いついて吉田山に行った。旧制三高の逍遙の歌の「・・・月こそかかれ吉田山」の吉田山、東の方から住宅街の坂を登ると小さな公園風の吉田山山頂に三等三角点があった。標石を前に設置年明治36年(1903年)、標高105.12メートルの説明があった。西に下ると京都大学の正門である。月末には久しぶりに人吉の先の大畑の高原の植物を見ながら歩き大畑梅園へ、色とりどりの梅は満開、春の薫りの楽しい一日だった。

3月初めには仰烏帽山へ。昔は元井谷から歩いたが、今は車道が上までできて、少し登れば福寿草咲く道、天気がよく花は大きくパッチリと開いてきれいきれい！花の中でのおにぎりは美味しかった。10日にはアルコール会で背振山系、背振山から唐人舞、漁師岩を通り小爪峠を下った。下旬には中央町の白石野公民館協会の大きなイチイガシを見て慶専寺へ。満開のシダレサクラの咲くお寺の御堂で朝食を食べた。31日には、峠の茶屋から金峰森の駅へ行き、ここから五百羅漢や武蔵ゆかりの霊巖洞へと歩いた。

4月には所要で忙しく、アルコール会のワラビ狩りで南小国のまぜの周辺をワラビをとりながら歩いただけで終わった。5月には韓国濟州島のハンラ山へ出かけた。三度目のハンラ山登山である。山頂付近は登山禁止とかで、御里牧広場から1700mウイセ上りまで登って昼食、屏風岩を通り霊室休憩所へ下った。天気は上々、ゲンカイツツジは満開、オオサクラソウ、シロバナリンドウ、スハマソウなどなつかしい花には出逢えた。そして翌日の竜頭海岸の岩場歩きも変化に富んで見事だった。

6月は上京して山はお休み。7月は汗したたる小岱山へ。蛇ヶ谷公園から丸山を経て観音岳、昼食後は急坂を下り丸山キャンプ場。なんと暑かったことか。しかし月末には清和天文台から井無田キャンプ場への植物を見ながらの高原歩き、天文台は700mの高さにあるので風はさわやか、外輪の眺めは広大、キャンプ場の溜池周辺での食後、溜池の湿地の植物を見て回った。

8月の初めは雲仙へ。ロープウェーで妙見駅に上り、妙見神社から急坂を下り、植物を見ながら紅葉茶屋跡、ここで昼食をとり普賢岳に登る。下りはあざみ谷を仁田峠へ。平成2年の噴火で枯れた樹木も大分蘇生していた。翌日は野母崎の樺島海岸の植物を見て亜熱帯植物園の楽しんだ。月末には日本山岳会自然保護委員会後援の「フォーラム IN 安曇野」。小谷の塩の道ハイクに参加した。小谷村梅池の前山百体観音、ここから千国街道を杳掛の牛方宿、親坂を下り千国番所跡、千国諏訪神社を経て三夜坂を下り、小谷役場まで歩いた。その夜のひなびた風情の小谷温泉には、昔の湯治場のような心温まる優しさがあった。

9月の初め南阿蘇休暇村に泊まり、翌日は植物を見ながら菊池溪谷の清水谷から溪谷沿いの遊歩道を広河原までゆっくり歩いた。中旬には相良村の北岳、人吉からバスに乗り、晴山から歩き始める。道は舗装道路だが、ところどころに栗園、ミツバチの巣箱、5～6匹のサル、赤いヒガンバナも咲き楽しい登り、山頂近くの北岳神社の周辺にはウワミズザクラ、ムクノキ、チシャノキ、夫婦杉の大木があった。そして21日、22日宮島で日本山岳会第19回全国支部懇談会が開かれた。21日は江本嘉伸氏の基調講演、パネルディスカッションがあり、夜もなごやかに更けていった。

翌日は弥山登山、ゆったり歩きを考えロープウェーで獅子岩駅に上り、弥山本堂

を通り展望台へ。鹿と猿に弁当を取られないように昼食、弥山原生林の中を大聖院に下り森林浴を楽しんだ。月末は阿蘇の内牧駅より藁草の話を聞きながら小さな本塚を登り山頂で昼食、途中口の森天満宮で銀杏を拾ったり、初めてみるナガボノワモコウに感激したりした。

10月、何年ぶりだろうか、アルコール会で万年山へ。少々雨が降ったが黒猪鹿から自然歩道のゆるやかな道を山頂へ。下りも往路を黒猪鹿へ下った。更に中旬アルコール会の特例で熊野古道を歩いた。小口古道入口から前年の特例で歩いた道の反対の小雲取り越を桜茶屋跡、石堂茶屋跡、百間ぐらを経て請川に下った。苔むした道薄暗い林の道にハットするようなミカエリソウの美しさ、聖地に心いやされた山歩きだった。

11月はまた小袋山、仁王滝入口から滝の横を登り、笹千里、林道を下り釈迦說法座像へ。大きな大仏の下で昼食、山田の藤で有名な山田日吉神社に参り、玉名駅まで歩いた。いろいろな秋の果実の多い楽しい一日だった。

年齢と共に歩く山は低くなってきたが、2002年も楽しい一年、暇を見つけては金峰山、竜田山にもよく出かけた。また、年末にはカンボジアのアンコールワット、ベトナムの高原の山に植物を訪ね、日本と違う植生、山々の眺めにワクワクした。特にアンコールの沢山の塔の巾20cm足らずの高い石の階段登りは、スリル満点の山登りだった。

天草最低標高の山・明神山 10m

10240 永田 光義

私が明神山を知ったのは住宅地図を見ていたとき「明神山」という地名を見つけたのが最初でしたが、山と呼ぶようなものが存在するのか地図からは判断出来なかった。

そこで、現地を訪ねてみることにした。まず、志岐八幡宮に参拝した後、北方奥へ明神山公民館を目標にして地元の人に訪ねて歩いて行くと、住宅と畑に囲まれて二階建ての屋根よりやや低い高さの小高い丘があった。

明神山は苓北町志岐字明神山地内、志岐川の河口で富岡港に面した海岸平地に位置する。入口から階段となり、石造りの鳥居には稲荷社と彫ってある。続いて明神社と書かれた木造の赤い鳥居が十基ほど連なる。頂上にコンクリート造りの吾妻屋とその奥に石造の祠があり、明神様が祀られていた。周囲には桜が植えられている。

地元の区長さんの話によると、「志岐城に居城した志岐麟泉が外襲に対する海上警備の目的で石を積み、土を盛って作らせたもので、見張り場所としたと伝え聞く」と説明していただいた。歴史を調べてみると、志岐城は天草の中世豪族志岐氏の居城で、天正17年(1589年)志岐麟泉は天草五人衆と共に、小西行長と戦い敗れて

いる。これを「天正の天草合戦」と呼び、この戦いに備えて見張り場所を築いたことは十分推測できる。後に明神様を祀り、明神山と呼ぶようになり、この名称が地区名になったと考えられる。

明神山は標高10mで、天草の山の標高では低い方から数えて第二番目にあたる。最低標高の山は河浦町にある四等三角点「丸山」で、標高2.1m、国道に面し田の畦にある。従ってこの明神山が山の姿を成す天草最低標高の山と呼ぶに不都合はない。

2002年をふりかえって

8605 門脇 愛子

2002年をふりかえるために、日記をひもといてみた。恒例だった1月4日の金峰山初登り、今年も風邪のため出来ず、あまり良い出足ではなかった。しかし、1月28日シェルパ自然を愛する会探訪プログラムで、天草紫尾山からはじめて、年内24回の山歩きをしており、自然を愛する会から健康登山認定証と記念品をいただいた。女性最高41回には及びもつかないが、一応25位以内には入っていた。高い山には登らなかったが、里山には結構登ることが出来てよかったと思う。

里山といっても四季折々、いろいろな花や自然の風景があり、高い山に登っていた時とは又違う満足感がある。今でこそ、山によっては頂上近くまで車が入ってしまい、歩く距離が少なくなって、簡単に登れるようになっているが、その昔、アルコウ会で登っていた頃は、ほんとうに山麓から一日かけて登り下りしたことを思い出した。例えば芦北の大関山など、当時の写真を見てみると、全く趣が変わっていて驚いた。

その他、松島有料道路開通前のウォーキング（5月11日）や、“天草五足の靴を訪ねて”，“武蔵ゆかりの地を訪ねて”等ウォーキングもいくつか参加、年令相応の山歩きやウォーキングで、昨年も楽しみ無事終えたことを感謝したい。

昨年は支部の例会にはとうとう一回も参加出来ず、残念であり申し訳なかった。

2003年は新年晩餐会に出席でき、幸先よい。今年もよろしく願います。

新年初登山

5120 石井 久夫

例年の新年初登山は開闢岳とスケジュールを決めているが、今年は元日が天候不良で次の日に延ばし、当日になってあまりにも優れた2日の天気にはさそわれて、行き先を韓国岳に変更した。2003年の1月2日、今年最初の山行となった。

霧島火山群の最高峰である韓国岳は直径900m、深さ300mの大火口を持つ標高1700mの山で、その由来は霧島の火山活動が周辺の加久藤カルデラや始良カルデラにはじまり噴火を繰り返しながら、今から約6000年～22000年前

に噴き出した安山岩で形成された白状火山（ホマーテ）で、霧島の名花として知られるキリシマミズキ、ノカイドウ、ミヤマキリシマの花々が春から夏にかけて、その山体を色どり豊かな自然を持つ山である。

思いもよらない快晴に開闢岳にしようかと迷いながら韓国岳に決めた。当日朝、目を覚まし、外に出てみると快晴で、とりあえず準備していた装備を整理して、9時に家を出て、えびの高原に10時着、高原側から登りはじめたが、結構登山者も多く、県外からの登山客あり、親子連れの家族グループ、職場の仲間同志、なかには関東からの遠来の夫婦、1日に登ったが天候が悪く、ガスで何も見えなかったので又来たという地元の方もいた。

暮れに降った雪が、とけ氷になった道を頂上に向かうが、登山道はアスファルト道路のように堅くしまり、アイゼンも不要で歩き易い。3合目付近から少しずつ霧氷が見えはじめ、5合目からは南側の眺望が素晴らしく高隈山系、錦江湾、桜島はめずらしく噴煙がなく、開闢岳の尖った山容、雲海の向こうに浮かぶ屋久島の山々が望見された。

5合目を過ぎると南に大浪池が見えはじめ、池畔の樹木に霧氷の花が咲き、湖面は半分くらい氷に覆われ湖面の藍色と霧氷の白色とがマッチして、幻想的な風景となり、7合目付近では灌木に付着した霧氷が5cmにも伸びて見事な霧氷の森が見られた。

頂上についたのが11時過ぎ、霧島の連山が目前に迫り、360度の視界の中に遠く九州の脊梁山脈、雲仙・天草のやまなみ、尾鈴山系などすべての九州の山稜が遠望できた。

よくみると遠く祖母山系の連山が確認でき、近く球磨の山々に連なる市房山がいつもよりずっと近くにみえて感激しきり。登山者の輪ができて山談議がはじまり、関東から百山を目指して明日は開闢へ向かう登山者もいた。

ともあれ、まれにみる快晴の温かい一日で屋久島の宮之浦岳、永田岳も肉眼で鮮明にみえ、素晴らしい一日となった。

熱いお茶とおにぎりで昼食をとり、しばらく休憩をとり下山する。途中も続々と登ってくる人々の多さに驚き、又賑やかな山行であった。風のない晴れた日の登山を満喫しながら、山を振り返ると、霧氷に輝く霧島の連山が手を振っているように見え、本当に楽しい山行となった。

回想の山 — エアーズロック —

9328 川端 浩文

あまりにも強烈で印象的な山エアーズロック（867m）は、オーストラリアの中央砂漠地帯に位置し、遠くから眺めても近くから眺めても、また登ってみても言語に絶する山である。この山はオーストラリア原住民アボリジニーの聖地で、彼ら

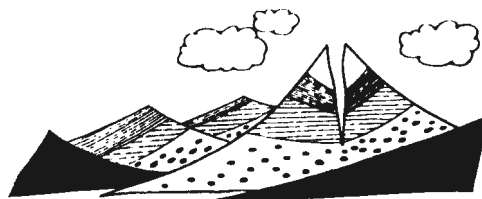
はウルルと呼んで崇拜し、登山はおろか写真撮影もして欲しくない特別な場所である。

山に興味を持つ誰しもオーストラリアと言えばエアーズロック登山を考えるとと思う。オーストラリア訪問5回目にしてやっとそのチャンスが来た。正月気分も冷め遣らぬ2000年1月5日。個人旅行の心細さも山への好奇心からどこへやら。飛行機を乗り継ぎ、やっと知人の避暑先マラクータ（オーストラリア南東のリゾート地）へ到着。もう日本ではもう見られなくなったどこまでも続く美しい砂浜のある小さな漁村で、普段の人口は数百人程度であるが、シーズン中で大勢の避暑客が訪れていた。

1月7日、メルボルンの知人宅を4人で出発。夏の盛りとは言え、肌寒い程の涼しさだったが、シドニー経由でエアーズロックのある空港に着いた時は猛暑だった。大陸性気候のため温度は低く夜は快適だった。オーストラリアの砂漠はアウトバックと呼ばれ、砂漠と言うよりは荒野と言った方がふさわしく、灌木が生い茂った乾燥大地である。360度視界を遮るものは何もなく、夜は南十字星をはじめ満天の星ばかりか、人工衛星まで見ることが出来た。

1月9日エアーズロック登山へ出発。この山は早朝から夜になるまで色の変化が著しく、また光の角度によって山容の変化も大変印象的だった。これはこの山自体の特徴である事は勿論だが、現地の気象が我々の住む日本と異なっている事にも原因があると思った。登山はその日の天候次第で許可されない時もあるが、幸い天候にも恵まれて登山開始。雨模様の際は一枚岩のこの山は滑りやすくとても危険である。登り始めは急勾配で鎖を伝って登り、およそ100m登ると勾配もやや緩やかになるが、なにしろ滑らかな岩盤でつかまる所がなく危険この上ない。途中、登り下りも多く一旦足を滑らせたなら止まるところを知らず転落しそうで大変緊張した。また、砂漠の中の炎天下の登山には水分補給は絶対欠かせない。知人はバックバックからいつでもチューブで飲めるようにしていた。登るにつれ視界は開け、360度のパノラマを楽しめた。頂上は平坦であちこちに窪みがあり、驚いたことに水溜まりの中では小さな魚が泳いでいた。遙か西方にその後訪れたオルガ山(1069m)の異様な山容を見ることが出来た。2時間余りの登山であったが、ありとあらゆるものが珍しく驚きの連続だった。

エアーズロックは登山に興味ある人ばかりでなく、地質・気象・動植物・映像撮影・原住民等に関心のある人にも最適な場所だと思う。



ニュージーランド一人旅

8190 工藤 文昭

約25年前の夏に、雪と氷に覆われたマウント・クックに26時間の時間を費やし、山頂に立ち、そして生還した時の感動と苦労は今も忘れることはない。その後ミルフォード・トラックの踏破や、その他のトレッキングでニュージーランドを旅したが、人も自然も素晴らしく、カナダと共に私のお気に入りの国である。11月も半ば、そろそろ冬山の計画を立てようかという頃に、突然JTBから、「ニュージーランドの格安航空券がありますいかがですか？」という連絡をいただいた。これまで4回程山登りで出掛けた国ではあるが、私の殊の外お気に入りの国である。日本からの直行便はJALとニュージーランド航空の共同運行便しかなく、とにかく航空券が高く、皆ソウルやシンガポール、香港経由で入国している。しかし今回は長崎県のとある高校が修学旅行にジャンボ機をチャーターしたのだが、空席が多く出て、あなただけ特別にご案内をしますということだった。「あなただけ」なんて殺し文句を使われると一溜まりもなく、「行きます」ということになってしまう。幸運だったのは、丁度その時が、期末考査と授業のない日が続いて一週間の休みが確保できたことである。条件として、修学旅行生徒と一緒にだからアルコールがあまり積んでいけないことと、ホテルは旅費の内だが食事は機内食以外は一切なし、それで9万円弱の旅費だから、これはまさに格安料金ということになる。実際乗り込んでみるとリカー類はいくらでも飲めたし、ホテルはオークランドの繁華街に位置する立派なものだった。

福岡を飛び立って約12時間、日本航空ジャンボ機はニュージーランド北島北端に長く伸びる90マイルビーチを左に見ながらゆっくりと降下を始めた。オーストラリアとの間に広がるタスマン海は黎明を抜け出たばかりの真っ赤な朝日に染められてうねりながら何処までも輝く。ニュージーランド最大の都市オークランドはもう間近だ。

3年前に来た時は、空港が改装中であつたが、今では立派な国際空港に変身し、アメリカンズ・カップの予選とも重なり、観光客でごった返していた。

農業国であるニュージーランドは、防疫のために食料品や果物、動植物の持ち込みには厳しく、靴に付着した土でもあれば、それを奇麗に洗い落とさない限り入国できない。同じ便だつたご婦人はりんご2個持ち込んだのが見つかり、200ドルの罰金を徴収された。ニュージーランダー（キウイ）はとても優しく親切だが、凜とした厳しさもある。

午前中、グループで市内観光に回り、模擬南極基地の雪上車に乗ったり、オーク

ランド市の中心にあるMt. イーデンの旧火山に登り展望を楽しんだりした。

午後から4日間はいよいよ自由行動で、皆思い思いに散らばっていった。私は、ひとまずホテルにチェックインしたが、出発前の睡眠不足がたたり眠り込んでしまった。ニュージーランド（NZ）と日本の時差は夏時間で4時間、夕方も9時過ぎまで明るく、7時頃に目覚めて、それから食事に出掛けた。初めてNZを訪問した25年前は、夕方7時になると商店街は閉じてしまい、それ以降は人通りもなく、食事もできなかった。しかし、観光客の増加もあってかこの頃では遅くまで店を開け、日本と同じコンビニがあちこちにできて24時間営業している店もある。昔、NZの家に招待されて、奥様のご馳走をいただいた後、ニュージーランドハズバンドといって、旦那が甲斐甲斐しく後片付けをし、奥様はロッキングチェアで新聞を読む光景にいたく感心したこともあったが、町の様変わりと共に家庭内の役割も変わりつつあるのだろうかと思った。

オークランド2日目は、ランギト島の山登りに出掛けた。オークランドから船で30分位で島の棧橋に着くのだが、船が港を出るとあたりには何十艇ものクルーザーやヨットが紺碧の海を行き交う。さすがに帆船の町といわれるだけあって海を楽しむ者が多い。ランギトは周囲4キロ程度の小さな島だが、約400年前の火山活動で隆起した無人島で海岸線から緩やかに起伏しながら300m足らずの山になっている。山頂には立派な火口もあり、全山天然林に覆われている。どの木にもゴブリンモス（サルオガゼ）がぶら下がり、妖精（ゴブリン）でも現れそうな感じだが、海の近くで雨も多いのだろう。中腹にはカウリの巨木も見られ数種の小鳥の囀りも確認できた。オークランド大の2人の女子学生が日本について興味あるらしく、話ながら登っていたら50分くらいで頂上に着いてしまった。立派な木製の展望台に立つと何も遮るものがなくこの上なく素晴らしい眺めだ。のんびり1時間程展望を楽しんで下山した。

3日目はワイヘキ島にでかけた。前日登ったランギトの裏側にある島で、50分程のクルーズで渡れた。NZでは温暖な気候のもと良質のワインが生産され、品質は今や世界基準といわれる。このワイヘキ島には20ヶ所以上のワイナリーがあり、見学に訪れる観光客も多い。島のあちこちには白砂のビーチが広がり、クルーザーで乗りつけ遊んでいる。夏とはいえ、木陰にいると寒いくらいで泳げるのかと思うのだが、皆平気で泳ぎ、寒くなると白砂に寝そべり甲羅干しをしている。この島は面積も大きく、起伏も結構あり車でないと回れないのだが、ワイナリーでの試飲をしながら歩き回るのもいいだろうと結局6時間歩き回って3つのワイナリーを訪ねるのがやっとだった。何処も試飲は自由にできるので、ここぞとばかりグラスを重ねたのだが、その気候風土が醸し出したワインをその土地でいただく幸せは正

に至福の時と言えるのだろう。どれも深い味わいがあったが、特に私が気に入ったのはアイスワインで、サラリとした中に程よく甘く格別の美味しさだった。アイスワインは、ドイツやカナダが有名で、いずれも高価で手が出ないのだが、NZでは2千円前後でも十分美味しいものが買える。勿論この国ならではのキーウィーフルートワインの美味しさは言うに及ばぬが、NZワインには気取らない新しいワイン文化を感じた。ほろ酔い気分で帰りの船のデッキに横たわると日差しは厳しい。風は冷たいのに肌がピリピリ焼け焦げるようだった。

4日目は、オークランド探索にあてた。この町はNZの表玄関。人口約110万、全国の3分の1が集まる大都市で、古くから「クイーンシー」とか、「シティーオブセイル」（帆船の町）の愛称で親しまれ、坂の多い町並みとヨットが浮かぶ海が美しい。市内には、火山活動でできた丘が多く、前述したイーデン山（196m）や頂上に1本の木があるワン・ツリー・ヒル（183m）、オークランド・ドメイン公園、オークランド大学のキャンパスがあるアルバート公園を回った。市内を回るリンクバスを使えば難なく行けるのだが1日掛かりで歩いて回ることにした。車もこの頃では多くなり、その8割方は日本製の中古車だが、大切に乗り回している姿は堅実な国民性を現しているようである。

丘の上に立つと右手に南太平洋に面するワイテマタ湾、左手はタズマン海に面するマヌカウ湾に挟まれたオークランドがハーバーブリッジを中心に広がる。その名の通り、丘の上に大きな木が1本立つOne Tree Hillからは緑豊かな町のパノラマが美しい。その裾野はそのままコーンウォール公園になっていて、公園内の牧場には羊が放牧されている。その光景からはとても大都市にいるとは思えない。広大な敷地の公園は町中あちこちにあり、屈強な若者がトレーニングに余念がない。NZがラグビー王国なのも頷けた。皆自由に戯れ、のんびりとリクリエイトしながら心の余裕を培っているようだ。この町3回目にして、オークランドの本当の魅力が解った一日だった。

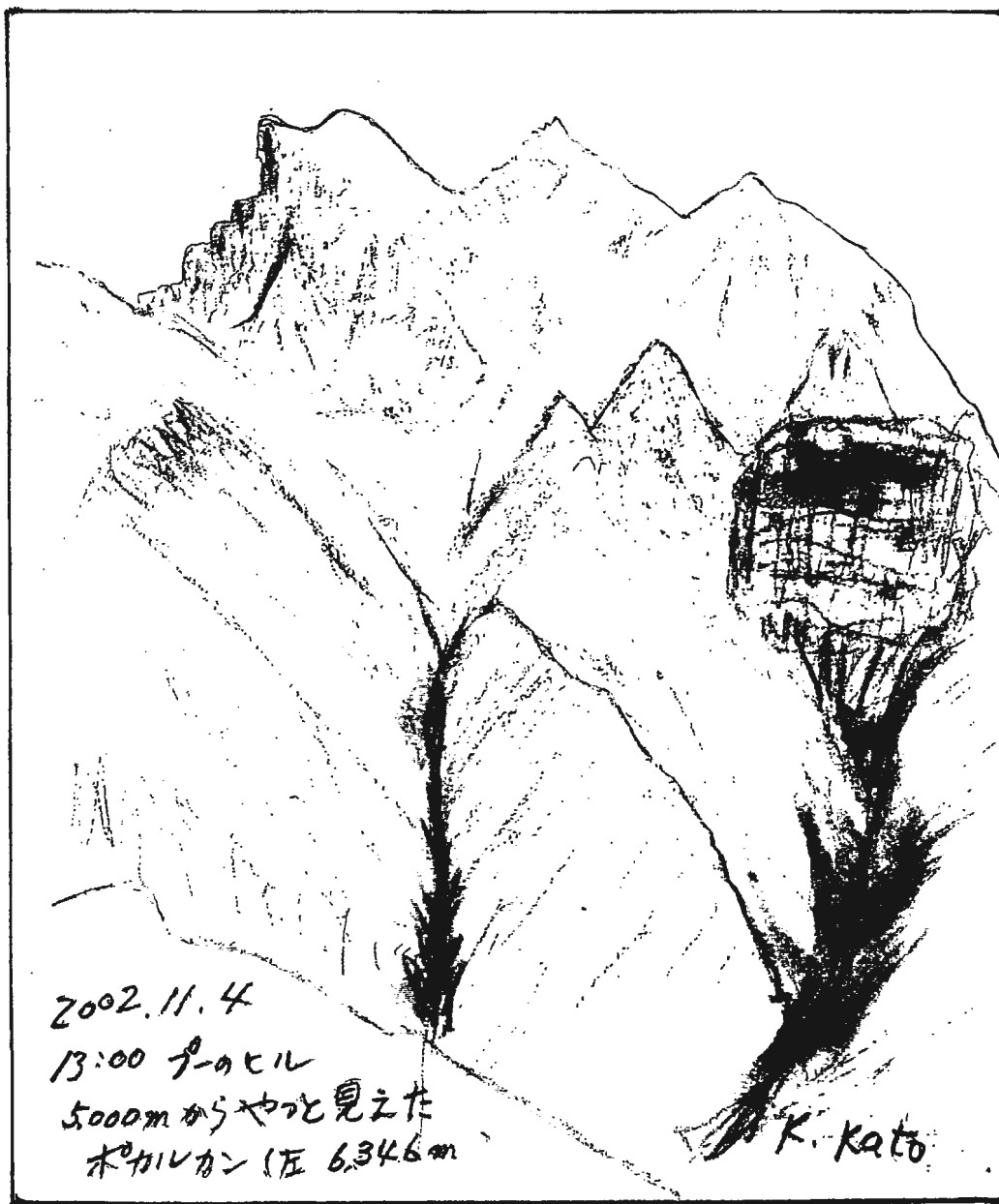
翌日朝9時にNZを発ち、帰りは10時間半くらいで福岡に帰った。

わが愛するNZの魅力は何だろうかと考えてみた。ニュージーランダーの人の良さもあるが、それは自然に恵まれ、緑豊かな原生林、神秘的な湖や氷河、火山などのダイナミックな景観の中で過ごす幸せだろうと思う。正に「地球の箱庭」と呼ばれるにふさわしいバラエティー豊かな自然を国中何処でも楽しめる。ヘビや猛獣などの天敵も存在せず、大自然の中で自由自在にその日その日を、それぞれのリズムで遊べる。ニュージーランドの人々が守り続ける、あるが儘の大自然は、幾度訪ねても変わることがない。亦近いうちに訪ねたいものだ。



特別寄稿

ポカルカン峰初登頂



2002年12月

11771 加藤 功一

ポカルカン峰について

私は登山をする以上は一度はヒマラヤの頂上へ立ってみたいと夢みてきた。
今年退職を機会にそのチャンスが訪れた、さっそくペリヒマールにあるヒムルン・ヒマール峰(7,126m)の登山を計画したがパートナーが見つからずじまい。
その折、ネパール政府が新たに103座を許可した中にヒムルン・ヒマールすぐ近くにポカルカン峰(6,346m)があった、7,000mには満たないが、これなら一人でも登れると思い計画した。
この地域には1983年カングルー峰登山の時入っており、地理的には心配なかった。
資料は北大山の会がヒムルン・ヒマール頂上から撮った写真1枚と橋本さんからもらった地図を参考とした。

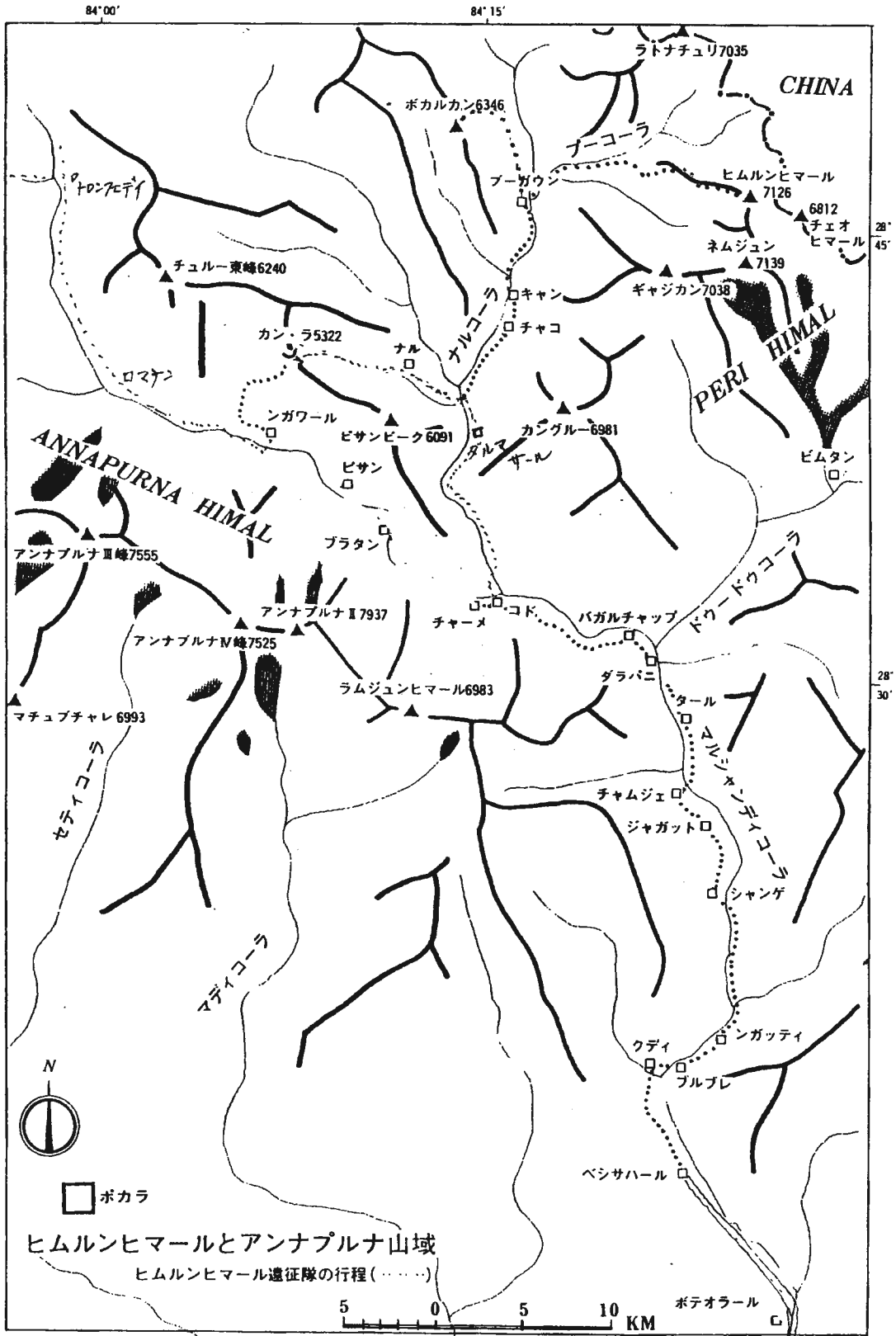
計画と行動概要

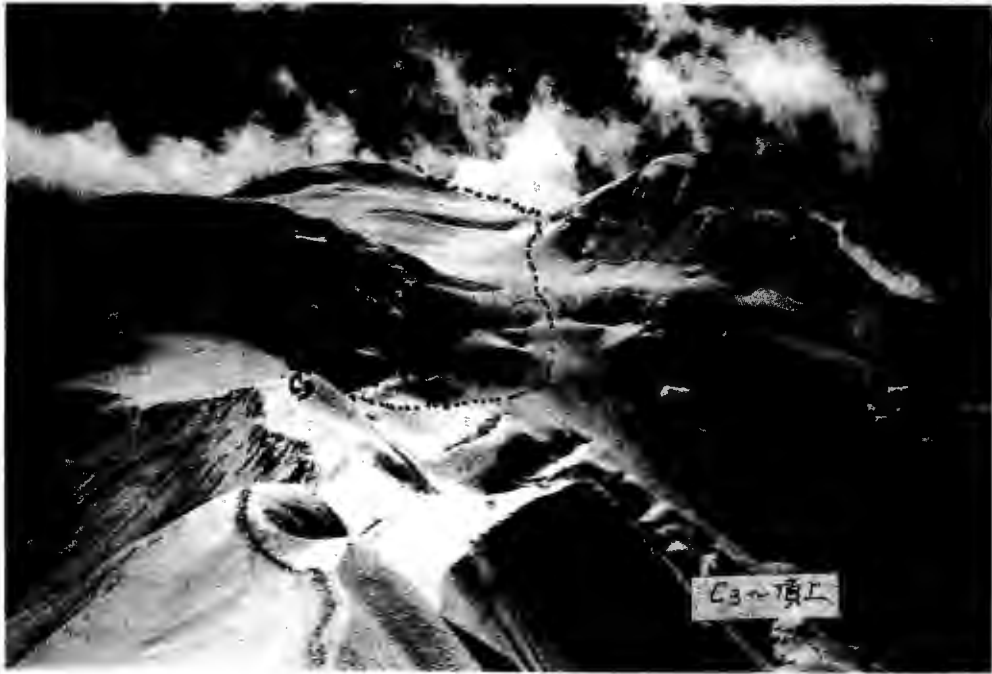
1. 計画

- (1) 隊の名称 2002 ポカルカン登山隊
- (2) 目的 ポカルカン峰(6,346m)の初登頂
- (3) 期間 2002年10月10日～2002年11月17日
- (4) 隊の編成(加藤とCOSMO TREKメンバーとのジョイント登山とした)
- 隊長 加藤 功一 (61才、登山歴42年):総括
1983年カングルー隊長、1997年アンナプルナ(ツロブキン峰)
- 副隊長(登攀隊長) ペンバ・チェリン(58才、サーダー):交渉
ネムジュン・ヒマール、エベレスト、シシャバンマ等18峰
- 隊員 パーニマ・ラマ(51才、シェルバ):装備
ダウラギリ、ランタンリルン、ヒムルン・ヒマールのその他多数
- 隊員 スバ・マジュ(55才、コック):食料
マナスル、ランタンリルン、ヒムルン・ヒマールのその他多数
- BCサポーター ラム(25才、高所ポーター)
ラクマンティ(25才、高所ポーター)
- 往路キャラバン(ポーター:6名、ロバ:8頭)

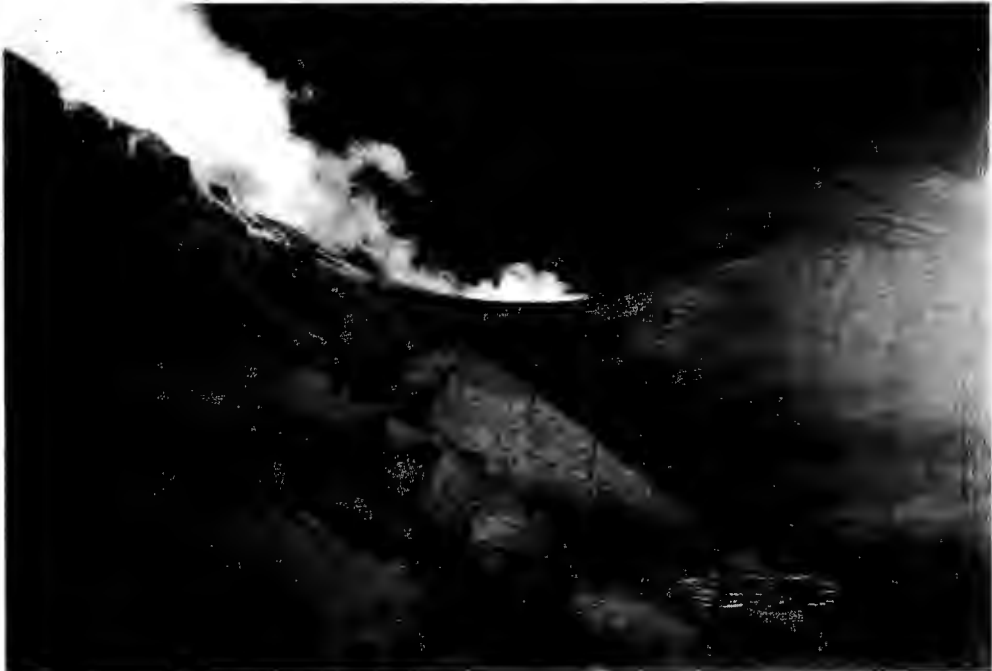
2. 行動概要

2002. 09. 11	日本出国
9. 15～10. 05	クーンブ トレッキング(エベレスト街道)で高度順化(別途記録)
10. 10	カトマンズ発
10. 19	BC設営(4,850m)
10. 21	C1設営(5,360m)
10. 28	C2設営(5,700m)
10. 30	C3設営(6,050m)
10. 31	登頂(加藤、パーニマ、ラム)
11. 03	BC撤去
11. 15	本隊は往路と同じルートでカトマンズ帰着
11. 17	加藤はトロンパス→ポカラ経由でカトマンズ帰着(別途記録)





6,000m峰から見たポカルカン山頂(中央)



ポカルカン主峰への取り付き(C3から)



ポカルカン山頂 バックの山はヒムルン・ヒマール、ネムジュン・ヒマール



ポカルカン山頂にレリーフを埋めた - 21 -

登攀活動

10月19日 ベースキャンプへ

ベシサールからBCまで9日間と長い、私は空身でのキャラバンとはいえきつかった。キャラバンは隊員4名、ポーター6名、ロバ8頭、ナルコーラが通行できるか心配していたが初めは道が狭くロバが通れないため、1時間かけてスコップやピックルで土手を削って道を造ったが、その後は道も良くスムーズに進んだ。途中プーガオンでBC予定地への案内人を雇う、次のムールカルカでロバから馬にチェンジ（高度が高くロバは無理なため）、BC予定地のチュベルへ着く、ここはヤク・羊等の放牧地で高度は4,850m、すぐ近くに沢がありネムジュン・ヒマール、ヒムルン・ヒマール等が見え展望が良い所で、さっそくBCを設営した。隊員を集めミーティングを行い、明日からの登山活動は登攀隊長（ペンバ・テェリン）の指揮によることを周知した。

10月20日 快晴 午前中：祈願祭 午後：C1へのルート調査

祈願祭の準備でペンバとポータでタルチョを張り、パーニイマはトウモロコシの粉で供え物を作った、祭壇の前に加藤、ペンバ、パーニの3人が座りパーニマがお経をととなえ、これからの登山の無事を祈った。午後ペンバとパーニイマでルート調査へ、モレーンから続くなだらかな尾根を5,360mまで登り、ここをC1予定地とした。BCでペンバと今後の予定について打ち合わせた（21日：C1へ荷揚げとC2へのルート調査 22・23日：休養日 24日：C1設営とC2ルート調査 25日：C2設営 26日：頂上へのルート調査 27日：アタック）

10月21日 快晴 C1への荷上げとC2へのルート調査

昨日C1へのルート調査が済んだことから、今日はC1への荷上げとC2へのルート調査（ペンバ、パーニマ、ラム）、BC～C1は2時間30分程度。C1上部の尾根を5,550mまで登ったが、途中で切れており登頂ルートは取れないことがわかった。私はC1からヒムルン・ヒマール、ネムジュン・ヒマールのルート調査をした。
①ヒムルン・ヒマール南峰へのルートは主峰の頂上経由しかルートはなさそう。
②ネムジュン・ヒマールの北面氷河はクレバスの無い所を選んでルートが取れると思うがここからは氷河の最下部が見えないので後日調査する。
C1に3者が集まり今後の登山ルートについて検討した結果、C1から右下ヘトラパスしガレ尾根を登り雷の壁を乗り越え（フィックスがいる）上部の雷田から右の雷稜をたどれば頂上へ行けると判断しBCへ下る。BCのテントの中はサウナのように暑い、タオルを水にひたし10日ぶりに身体の汚れを拭く、それから沢に行き洗濯をした。明日と明後日は休養日なのでのんびりした気分だ。

10月22日 快晴 休養日

毎朝6時頃になるとペンバとパーニマのテントからお経が聞こえてくる（テントは3人とも別）ペンバはブッダを信じており家には立派な仏壇がある、長男はインド・長女はカトマンズでブッダの勉強中とのこと、また、パーニマは25才までブッダ生活をしていたとのこと。今日は休養日、天気が良いので昨日洗っておいた下着を外に干し、テント内を清掃した。ヒムルンヒマールとネムジュンヒマールは先にスケッチしたが、今日はギャジカンを入れスケッチブック2枚に亘り大パノラマをスケッチした。その後、ペンバにユマールの使い方を習い、ペンバが作成した今後の登山日程について打ち合わせた。暇つぶしに河原へ行ったら、アンモナイトがゴロゴロしていたので形の良いのを拾った、誰か石を割ったような跡もあったが、普段は人が入らないのでアンモナイトが残っているのだろう。

10月23日 快晴 休養日

昨日から2日続きの休日、毎日晴天が続いており丁度アタックの時期に天気が悪くならないかと心配だ。(ペンバに「なぜ2日間も休日を取るか?」と聞いたら「これから6日間の連続登山となるので先に身体を休めておく」との返事。

am: アンモナイト拾い(10個拾った)、pm: サンゴ拾い(ペンバは幾つか拾ったが、私はゼロ)パーニマにヒムルン峰の下をトラバースして南峰へ行けるか検討するように指示。コックのスパには、もしポカルカンに登頂したらヤギ1頭カットし登頂祝いしようとした。

10月24日 快晴 C1設営

先にC1へデポしておいたが、今日はC2分を含め全部荷上げした、C1へはテント2張でペンバとパーニマはC1泊まり。

私は高度順化のため、先にペンバ達が試登山した尾根を5,550mまで登りネムジュン・ヒマールの登路を調査した結果、氷河の下部はアイスフォールで大きく切れているのと、ヒムルン南峰とネムジュンの間は高さ300m位のナイフリッジとなっており通過は不可能と判断、BCへ。

10月25日 快晴 C2へのルート調査

C2へはC1から右下へトラバースしガラガラの尾根を2つ越えて正面に見えるピーク(後日6,000mピークと呼ぶ)基部に取り付き、岸壁上をC2と決め(5,700m)デポした。その上部5,830mまで登りにフィックスをデポしてC1へ引き返しC1泊(ペンバ、パーニマ)私はC1から上部のルート調査の状況を一部始終見物、ルートが延びたのに満足した。今夜は初めてC1(5,360m)に泊るが寒くはないか心配だ。

10月26日 快晴 ペンバ病気で全員BCへ

私は高度順化のためC2予定地まで登り、さらに右へトラバースしてポカルカンの頂上が見える所(ポカリの上部)まで行きルートを確認した、この谷はクレバスが多くルートとして使えないことがわかった。

C1へ引き返す途中でパーニマと会った。その時パーニマから、ペンバとC2設営に向かっていたがペンバが胸の所が痛むと言ってBCへ下ったことを聞いた、それでパーニマもBCへ下りてペンバの様子を見て私に報告するように指示し、私はC1に泊まることにした。

17時の交信でペンバから直接病状を聞いたところ、「胸と腹が痛む」と苦しんでいる様子なので私もキャップランプをつけてBCへ下った。

ペンバはBCのテントの中に座わり胸を押さえてゼエゼエいっており、どこが痛いかと聞いても「胸か腹かわからない」がとにかく痛い、息が苦しそう「ヘリコプターを呼ぼうか」と聞いたら、「今晚は我慢する」と言うのでパーニマに看病してもらい様子を見ることにした。こういうことから明日は休みとした。

10月27日 快晴 休養日

ペンバは何も食わず水ばかり飲んでいて、夜半に吐いた様だが朝は少し良くなっていたのでカトマンズへ帰すことにし、コトまでラクマンティを付けて下ることにした。

チャーメからCOSMOに電話して事の次第を大津さんに説明するように指示した。

また、大津さん宛に私からのメモを持たせた。

これで私のポカルカン登山は駄目になるかと思ったが、パーニマとスパの協力によりBCメンパーのラムを登山に当たらせ、パーニイとベアで行動することにした。

パーニマと今後の登攀計画について打ち合わせ、明28日C2を設営しその後3日間ルートを開きアタックすることとした。

10月28日 快晴 C2設営

今日から再スタート、パーニマとラムでC2設営、その後パーニマの指導で雪上訓練(アイゼン、ザイルテクニック等)、C2泊。

私はBCからC1入り、C1泊。

10月29日 快晴 頂上へのルート調査

パーニマとラムで頂上へのルート調査、雪壁をアンザインでラッセルして登りフィックス1箇所、6,000mピーク、そこから主峰へ続く尾根を1時間かけてトレースしC3予定地を決めC2へ、C2泊。

私は個人装備をC1からC2まで2ポッカ、5,360mからのポッカは苦しいが、頑張りC2へ、C2。

10月30日 快晴 C3設営

C3へはC2のテント2張を持ち上げることにし3名でポッカ、6,000mピークへは急峻な雪面が続いており苦しい、私はフィックスにユマールを使用して登った。

6,000mピークから主峰へは緩い尾根が続いており、そのコルにC3(6,050m)を設営した。パーニマとラムは引き続き主峰へのルート工作に出かけ、主峰取り付きの1ピッチにフィックスしてC3へ引き返した。

調査の結果、主峰への登路は頂上からまっすぐに落ちている急峻なガリーを登る、途中で大きなクレパスが2つ見えるが巻いて登れそうだ。

主峰へつながるルートはこれしかなく、ルートファインディングが的中したことを喜んだ。

頂上へのルートも見えてきた、明日はいよいよアタック。

アタックの日

10月31日 快晴 C3発:7:00 頂上:11:40~12:55 C3着:14:35

今日はいよいよアタックの日、5時に目覚めテントの外を見ると星が輝き良い天気だ。

C3は6,050mで頂上が6,346mなので300m登ればよい、出発を6時に予定していたが朝食及びテルモスの湯を沸かしていたら7時になってしまった。

頂上へのルートはC3から主峰取り付きまでトラバースし、アイスビルディングの下を通り主峰からまっすぐに落ちているクレパスのある急峻なガリーを登る(昨日トレース済み)

途中フィックスを2箇所したがフィックスが、もうフィックスが無いいためメインザイルによりスタックで登る。

雪が膝までありザラザラ崩れて進まない、一歩進むのに3回呼吸しザイルにユマールを掛け腕の力を借りて登る。

じっとしていると足の指先がジンジンと痛む、凍傷にならないように指先を動かした。

途中ヒドンクレパスがあり20cm位開いて足元のザラメ雪を吸い込んでいたのには肝を冷すポカルカンの頂上は8畳敷位広い、高度計は6,340mを指している右方100m先に急峻な山頂が見える、どう見ても高さが同じ位だ、パーニマは「ここが山頂です」と言うが、せっか

くここまで登ったのに、もしあちらが高かったら後の祭りだ、ナイフリッジをスタックで登り頂上に着いた高度計は6,340mと全く同じ高さだ、旗を立て記念写真を撮って引き返した。ポカルカンの頂上から360度の展望が素晴らしい、北からラトナチュリ、ヒムルン・ヒマール、ネムジュン・ヒマール、ギャジカン、アンナプルナ、ダウラギリとヒマラヤの展望台だ、ネムジュン・ヒマールをバックに記念撮影。

記念として、私とヒマラヤへ登ろうと約束した、今は亡き岳友の天本さん、重永さん、立石さんの名前を書いた名刺をコップに入れ雪に埋め冥福を祈った。

下りもアンザインしてC3まで1時間40分で下った、さすがに疲れたが高度障害もなくポカルカンを初登頂できたことに満足した。

11月1日 快晴 BCへ下山

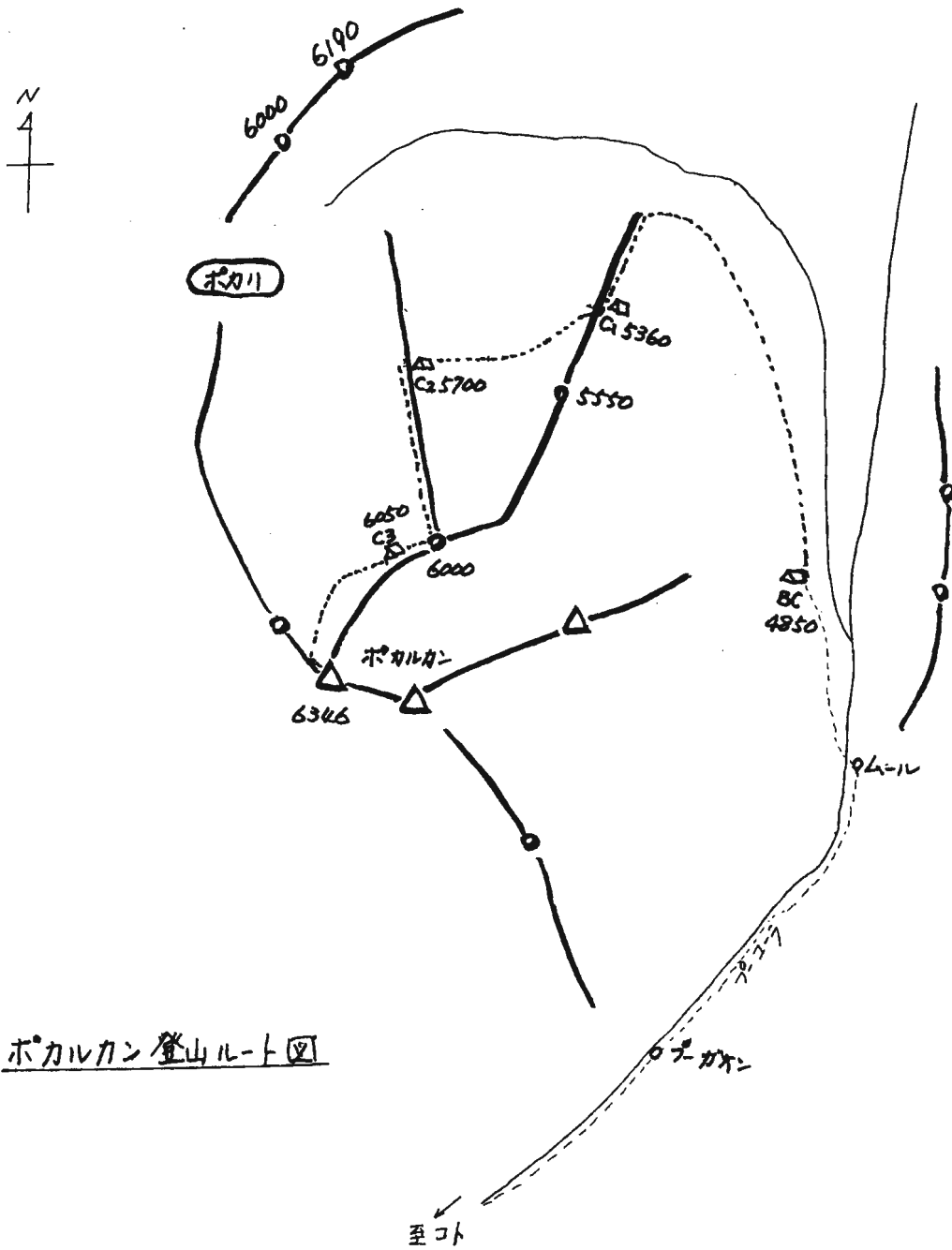
朝起きてポカルカン主峰を見ると、昨日登頂した時のラッセルの跡が頂上へ向かって続いており、大きなクレパスも見えている、「あんなところによくルートが取れたものだ」とパーニマを驚めてやった。

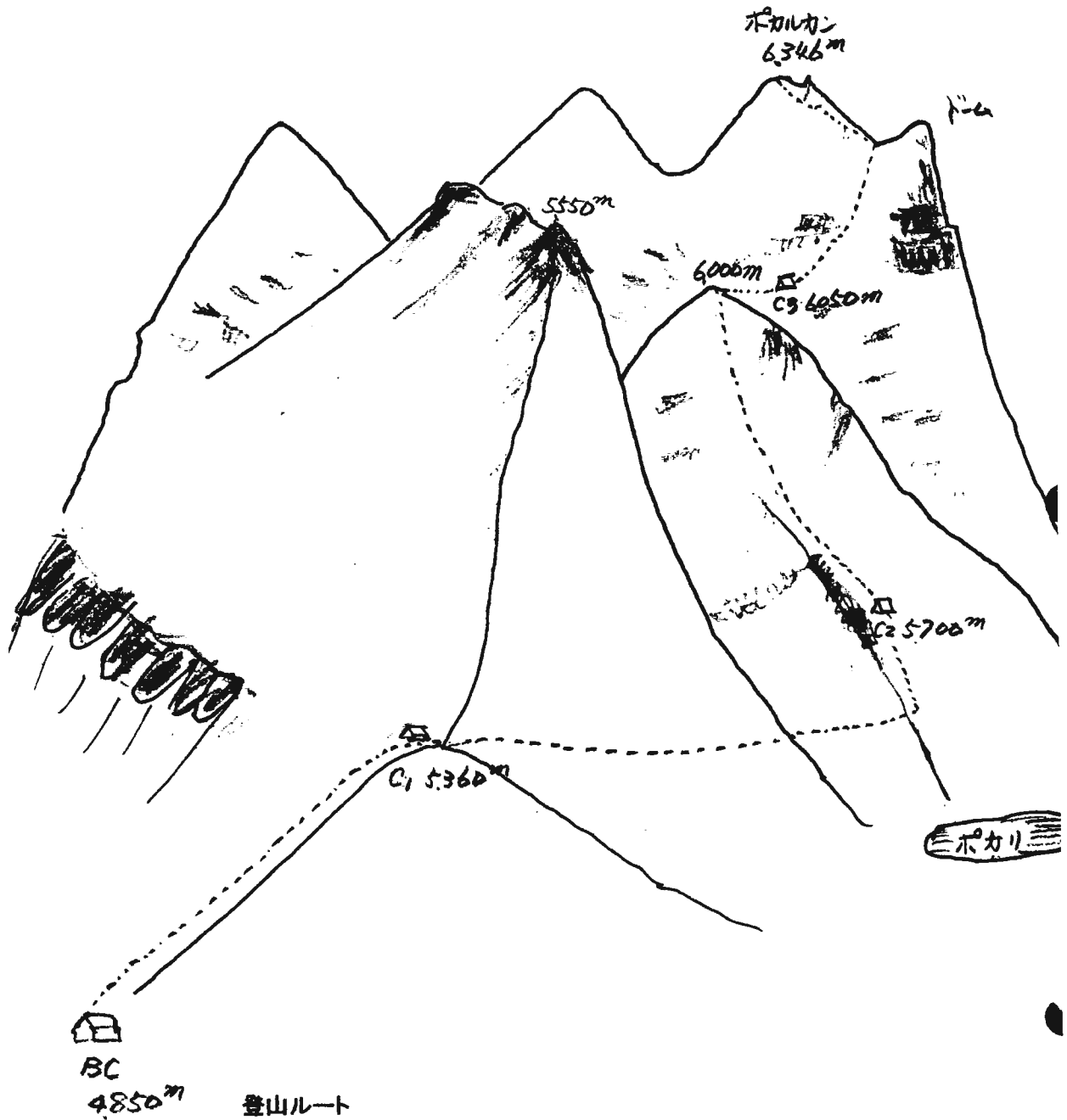
いよいよBCへ下山、C3を撤収、C2のデポを取り、C1の撤収で荷がどんどん重くなった。

下りながら、ポカルカンをもう一度見たいと思って振り返ったが前山に隠れて見えなかったが初登頂の喜びをかみしめながらゆっくりBCへ下った。

[まとめ]

- (1) 登山ルートは地図と写真から判断、南面は岩壁となっていたので北尾根を選んだ、北面は雪に覆われたなだらかな尾根であった。
- (2) 頂上が3つのピークからなっており、登路から見えないためどれが主峰か判断が難しかったが、ルートファインディングが的中し6,000mピークから主峰へ続く尾根が見つかった。
- (3) メンバー面では、C2設営時サードが病気(急性胃炎)になりカトマンズに帰ったが、残ったシェルパと高所ポーターの頑張りで登頂できた。
- (4) ポカルカン峰の登山は高所順化さえうまくいけば、技術的に難しい所はなかった。





登山ルート

BC(4,850m)

モレーン上の平坦地ですぐ近くに沢がある、夏場はヤク等の放牧地となる。
ポカルカン主峰は見えないものの展望に優れ、目の前にヒムルン・ヒマール、
ネムジュン・ヒマールが何時も見える。

C1(5,360m)

モレーンから続くなだらかな尾根で5,100m位までヤクの糞があり、その上から
雪となる。

C2(5,700m)

C1からトラバースして一度谷へ下り、6,000mピークへ続く尾根の岸壁の上。

C3(6,050m)

6,000mピークから主峰へ続く尾根のコル。

頂上(6,346m)

2つのピーク(広いピークと尖ったピーク)からなっており高さはどちらも同じ。

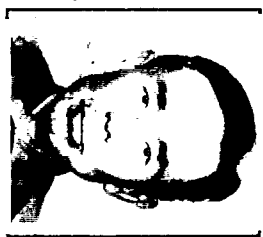


श्री ५ को सरकार

संस्कृति, पर्यटन तथा नागरिक उड्डयन मन्त्रालय

His Majesty's Government of Nepal

Ministry of Culture, Tourism & Civil Aviation



विक्रम संवत् २०५८ सालको कानिक् पृष्ठ गतेमा काठमाडौंमा जापान निवासी

श्री काइ-यी काता को नेतृत्वमा पोखरेकान माउन्टेन क्लब क्लबमा हिमचुली

पर्वतारोही दलले ६३६६ मिटरको उचाई भएको पोखरेकान हिमचुली सफलतापूर्वक आरोहण

गर्नु भएको हुदा यो प्रमाण पत्र जारी गरिएको छ।

This is to certify that Mr. Kaito Yoda President of Maunthain Club has successfully

climbed 6366 meter high Mt. Maunthain in the year 2058

पोखरे, नेपाल

Under Secretary

Joint Secretary

エベレスト・ゴキョートレッキング

行動記録

(9月11日～9月13日はカトマンズでトレッキングの準備)

9月14日 ルクラへのフライト中止

メンバーは私とガイドのペンバ・チェリン

カトマンズ空港でルクラへのフライトを待ったが(7時～11時30分)ルクラの天候が回復しないためフライトが中止となった、ホテルへ帰り足慣らしのためスワムナート寺院まで往復4時間歩いた夕食は一人屋上でモモ(ギョウザ)を肴にビールを飲んだ、月は半月であったが明るく投宿の「ムーンライトホテル」の名前にぴったり。

9月15日 カトマンズ～ルクラ～バクティマ

ルクラへのフライト8時の予定が9時15分スタート、ルクラ着9時50分、ルクラでポーターを雇いよいよトレッキング開始、バクティマ着15時、花の多い綺麗なロッジでスケッチした。

9月16日 バクティマ～ナムチエ

バクティマ(7:30)～ナムチエ(3440m 13:30)

ナムチエは今まで写真では何度も見ていたが、実際に来て見たのは今回が初めて、斜面に広がる大きな街でホテルがいっぱいだ、ペンバ(ガイド)の家は1つ先の村(ターモ)なので今日は自分の家に帰った。

明日はペンバの家に昼食を招待された、息子を迎えにやらせるとのこと。

ホテルの女将の勧めでホットシャワーを浴びたが、途中でぬるくなり暖たまらなかった、しまったと思ったらあんのじょう寒気がしてきた。

ホテルでゆっくりくつろぎ、夕食時イズランドから来ているトレッカーと話した、イズランドという国は聞いたことがないので「どこか」と聞いたら中東のシリア・レバノンの近くで人口600万の小さな国で、仕事は電話会社をリタイヤしたとのこと、私も同じなので話が弾んだ。

9月17日 ナムチエで休養

ペンバの息子が馬を引いて迎えに来た、馬には子供の頃乗せてもらったことはあるが、山坂を乗るのは難しい、馬の上から野の花を見ながら1時間半でペンバの家に着いた。

ペンバの家は2階が客室となっており、中央にストーブが置かれその周りがベッドになっていた。部屋には祭壇が置かれ経典も沢山積んであり、ペンバがいかにブッダを信仰しているかが伺えた、家族と記念写真を撮ったり、コド(粟)で造ったチャン(濁酒)と昼食はジャガと野菜を煮込んだものをご馳走になった。

帰りも馬で送ると言ったが花の写真を撮りたいので一人で歩いて帰った、途中花の写真を撮り山を撮った。

ホテルでは、まだ風邪気味なのでアルコールは避け、風邪薬を飲んで早く寝た。

9月18日 曇り ナムチエ(9:50)～タンボチエ(3860m 16:45)

今日からのポーターはペンバの奥さんだがなかなか強い、途中のロッジで登山家の小西浩文さんと会う(ペンバと一緒にエベレストに登ったそうで、私に紹介してくれた)

「日本人は少ないですね」と私が言ったら「いないのも静かですよ」、「馬場さんの声は最近聞こえないが元気ですか」、「仕事が忙しくて山に行けないと嘆いていました」「私は相変わらず山にほうけていると言って下さい」これからアイランドピークヘトレーニングへ行けらしい。

9月19日 晴れ タンボチエで休養

高度順化のためペンバと、前の尾根を4220mまで登る。

9月20日 晴れ タンボチエ(8:10)～ペリチエ(4240m 15:10)

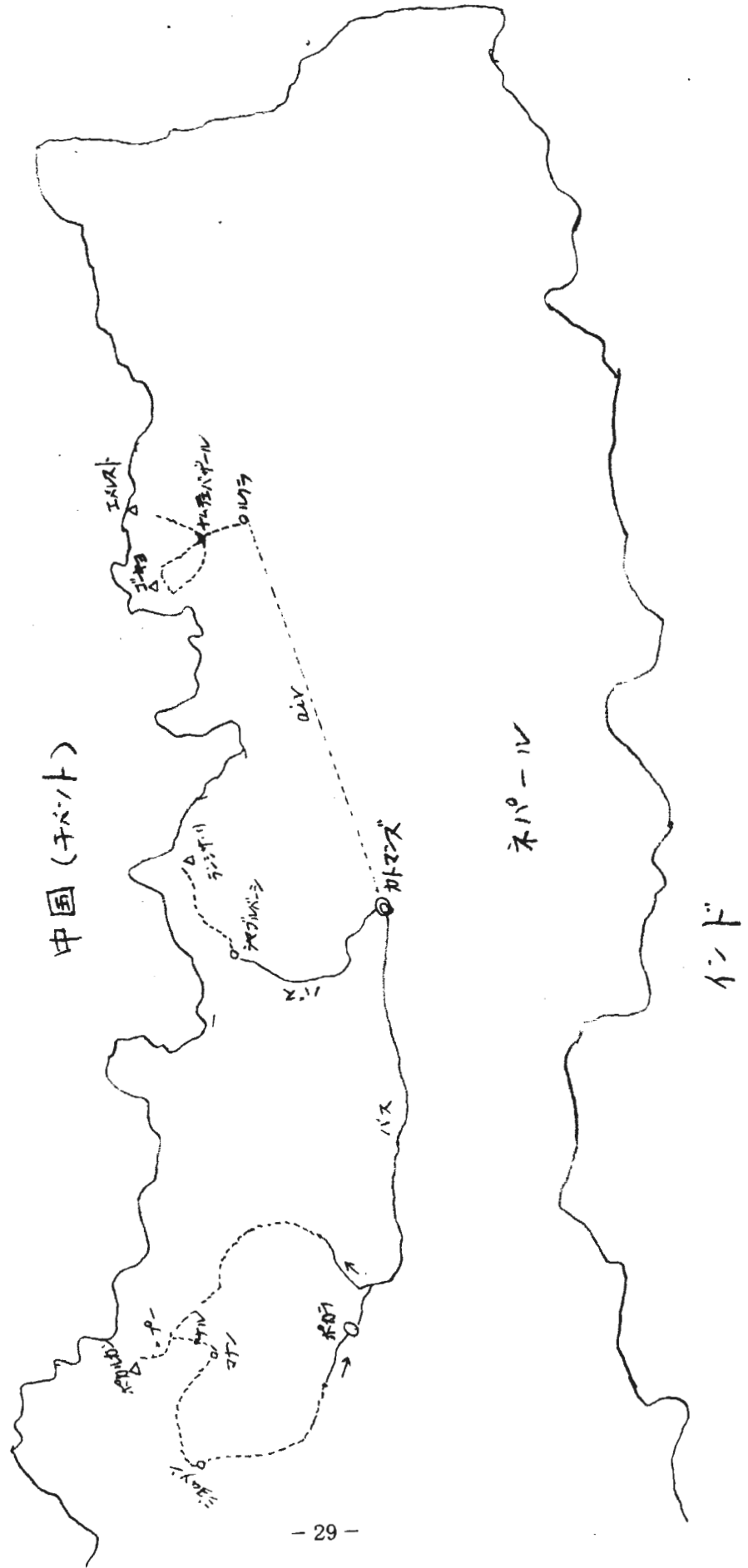
だらだら道ではあるが7時間の歩きはきつい、どうも身体の調子が良くない、咳が出て身体が重い、高度順化のため前の尾根を1時間登った。

夜中咳が出てゼーゼーいい、このままでは肺水腫になると思い、明日から引き返すことにする。このトレッキングは高度順化が目的であり、順化には相当気をつけてきたが仕方がない。



----- 今回のアジアン

ネパールとマヤ



9月21日 晴れ ペリチエ～タンボチエ
身体の回復のためタンボチエへ下る。

9月22日 曇り タンボチエで休養
1日中ベッドで過ごした、夕食頃から気分が良くなった。

9月23日 曇りのち晴れ タンボチエ(8:10)～クムジュン(3760m 14:00)
カラパタルは体調不調のため放棄し、ゴーキョへ転送することにシムジュンは向かう。
タンボチエから少し下ったブンギテンガでタンボチエ寺院のヘッドラマに会う、ラマは馬上でお付
の女性は歩いていて、ちょうどロッジで休憩されたので100ルピー包んでお払いしてもらった。
クムジュンはナムチエに次ぐ大きな明るい街で、広場では馬・牛・ヤクがのんびり歩き回っ
ていた、ペンバ夫妻はタモの自宅に帰り明朝来る。

9月24日 曇り クムジュン(9:30)ドーレ(4050m 16:30)
ドイツの4名が先に着いていて濡れたものを乾かしていた、私は自室で食事した。

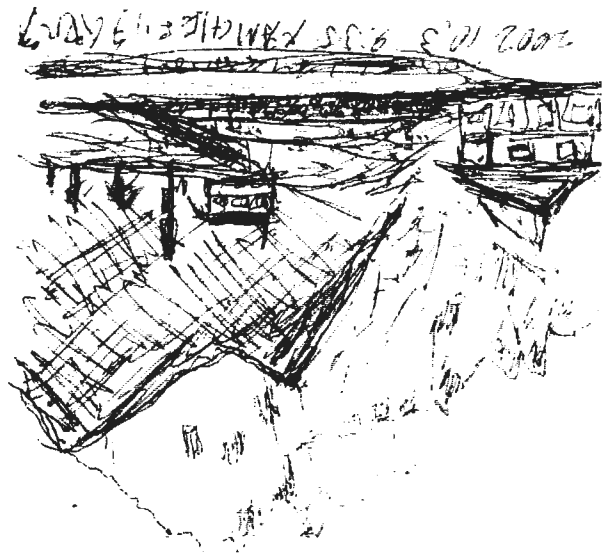
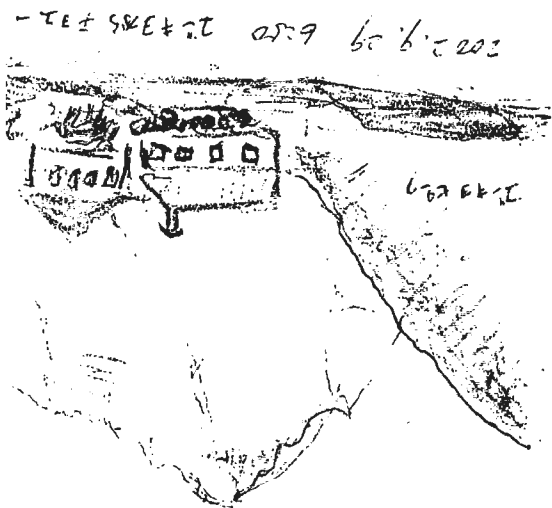
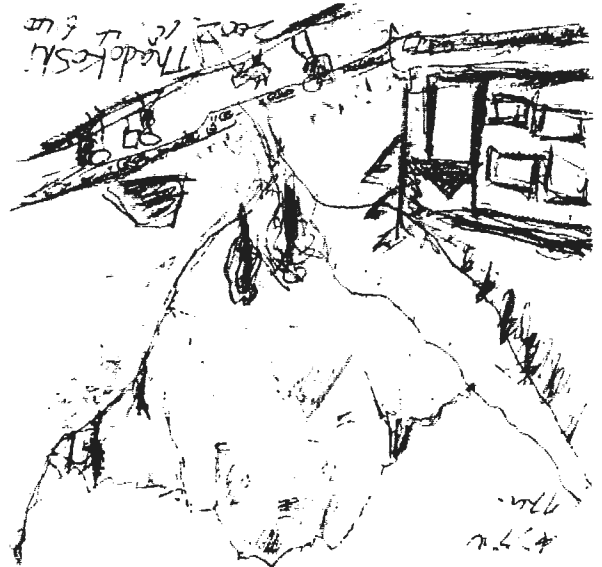
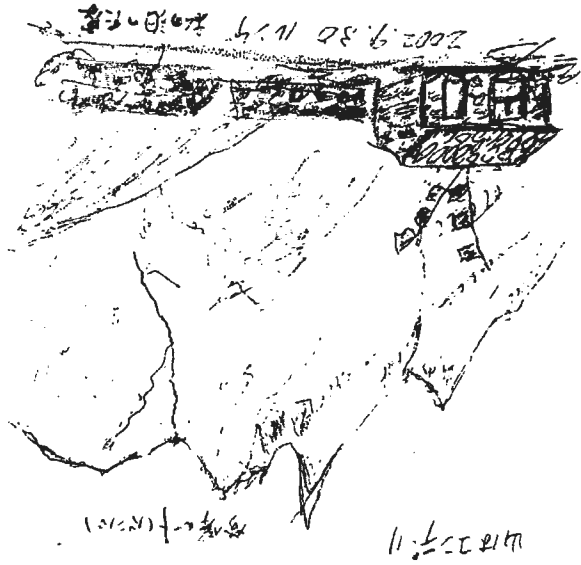
9月25日 晴れ一時小雨 ドーレ(8:50)～マツチャルモ(4410m 12:50)
ここはかつて雪崩が起き日本人が10数名死亡した所であるが、周りには雪もなく、そんな
ことがあったとは信じられない明るい谷である。
晴れてくると雪の反射で目が開けておれないのでロッジでサングラスを買う、よく見ると
日本製わかりビックリした。
この頃から高山病の症状はなくなり、快適な気分となった、久しぶりにビールを飲む。

9月26日 小雨 マツチャルモ(8:40)～ゴーキョ(4750m 13:00)
一面の銀世界、雨が途中で小雪に変わる、マウンテンバイクの3人から追い越された、彼らは
カラパタルにもバイクで行ったそう、私は高度順化のため上のピーク(4820m)まで登る
そこでガスがとれ氷河を初めて見た、チョユーから流れるゴジュンバ氷河である、氷河の中に
氷の山があつたり湖があつたりして、大きな音をたてて崩れ落ちていた。

9月27日 曇り ゴーキョで休養
休みを利用して一人でレンジョバスの偵察に出かけた、レンジョバスへは雪の着いた急な
岩尾根で相当きつそう、一応ルートがつかめたのでゴーキョへ引き返した。

9月28日 小雪 ゴーキョピーク登山(5360m)
ゴーキョ発(9:35)～頂上(12:35～13:00)～ゴーキョ着(14:25)
小雪の中、1日中視界なし、雪のため登山者は他に2パーティだった、高山病は全くなく自信
がついた、下山途中からゴジュンバ氷河が見え、また一瞬ではあるがチョユーが見えた。

9月29日 快晴 ゴーキョ発(7:45)～(レンジョバス5345m 12:45)～ルンデン(17:10)
今日は本ルートメインのレンジョバス越である、朝から快晴で北にはチョユーが見えている。
レンジョバスへはゴーキョ湖の縁を通り支尾根を登り、一度谷へ下ってから取り付く、ルートは雪の
べったり着いた急な斜面で膝までのラッセルが相当きつい、ペンバ夫妻はルートを拓きラッセル
してどんどん進む、私は後からやっと着いて行くのが精いっぱい、特に婦人(ポーター)は運
動靴なので心配していたら、足が濡らないように靴の中をビニール袋で覆い、また靴が濡らな
いように荒縄で巻いていた。
レンジョバスで昼食、快晴で久しぶりに展望がきく、北からチョユー、ガチュンカン、遠くに
エベレスト、またすぐ下にはゴーキョ湖、タウテエ、チョラツエとクーンブヒマラヤを一望できた。
ペンバが下降路を探していたが、こちらも急峻でアイゼン・ザイルなしで下れるか心配した
ペンバに私のステッキを貸し先導してもらった、急峻ではあったが雪が膝までありスリップしない
ので助かった。
下のレンジョ湖まで無事に下り一安心した、それからレンジョカルカを通り目的地のルンデンへ
一日中のアルバイトでフラフラだ、このルンデンの小屋はペンバの牧場でヤクや羊が放牧され
ている、ふだんは息子・娘が管理している、蠟燭の灯りで夕食を済ませ、私は別の牧草小屋で
干草を敷いて寝かせてくれた、外は満天の星、オーバーに言えば星の間に空があるといった
感じだ。



- 9月30日 快晴 ルンデン(7:30)～タモ(3500m 14:00)
 牧場のすぐ前にコンデリー(6187m)が聳えている、熊本クレツテルの生田君が登った山なので感心が深い、早速スケッチしてペンバに登頂ルートについて聞いた。
 途中ペンバの息子が馬を引いて迎えに来た、私は馬上で奈々ヒマラヤの景色を楽しんだ。
 今日はペンバの本宅泊まりちゃんをご馳走になり寝れていたので早く寝た。
- 10月1日 快晴 タモ～ナムチェバザール
 朝起きると同じ部屋にラマ僧がいた、起きがけにお経を唱えていたが、お経の合間に欠伸をしたり、うつらうつらしていたのがおかしかった。
 朝からペンバとミーティングすることになっていたが、ターメのヘッドラマの接待でビールを飲んだりして私との時間が取れない、11時半まで我慢しながらちがあかないので、私は腹が立ったので「帰る」と言ってナムチェに向かって帰ったら、途中で息子が私のリュックを持って追いかけて来たので、ナムチエのホテルで昼食をおごり500ルピーチップをあげた。
 2週間ぶりに頭を洗い身体を拭いたので気持ちが良い。
- 10月2日 快晴 ナムチエで休養 エベレストビューホテル～クムジュンへ散歩
 ナムチエヒルでエベレストをスケッチしていたら、ドイツのアベックが覗いて「絵を売ってくれ」と言われた、「私は売るような絵は描けない、しかしプレゼントはできる」と言ってあげた。
 絵の中に自分達がモデルで入っているのを記念として欲しかったのだろう、私はまた描けばよいと思っていたが、残念ながらその時はエベレストは顔を見せなかった。
 エベレストの見えるネパールで一番有名なエベレストビューホテルを一目見ようと訪ね、屋上でコーヒーを飲みながら目の前のエベレストをスケッチした、ボーイに「お客さんは少ないようだが」と聞いたら「シーズンになれば満員です」とのこと。
 周りは公園のように整備されており、すぐ下にはクムジュンの街が見えたのでクムジュンへ回って帰ることにした。
 クムジュンで3人の子供兄弟と友達になった、上の男2人は6年と3年生で下の女の子が1年生、女の子に「何か歌を歌えばペンをあげる」と言ったら手ぶりをに入れて「結んで、開いて」を日本語で歌ったのでびっくりした「なぜ歌えるか」と聞いたら「学校で習っている」とのこと、クムジュンの学校ではネパール語、英語、日本語を教えているそうである。
 (ここでもそうだがトレッキング途中、地元の子供との交流がとても楽しかった、日本から持っていった鉛筆やボールペンをあげると喜ばれた)
- 10月3日 晴れ ナムチエ(10:00)～タドコシ(3750m 16:30)
 途中のロッジでは、馬場君が初登頂したクスムカングルーをスケッチしたりしてのんびり下った。
- 10月4日 晴れ タドコシ(7:40)～ルクラ(9:40)
 空港にガスがかけており、今日のフライトはなし。
 空港近くを散歩したが、滑走路の両側10m間隔に土嚢が積んであり、そこから兵士が銃を構えていたのを見てマオイストのことを再認識した。
- 10月5日 晴れ ルクラ(7:40)～カトマンズ(8:20)
 朝6時頃から雲が取れてきた、昨日飛ばなかったのが今日は混雑している、4便一斉にフライトするので間違わないように、とのアナウンスがある。
 一路カトマンズへ。
- (10月6日～10月9日まで、カトマンズでポカルカン登山の準備)



ランタン谷トレッキング

(2)ポカルカンからの帰路(ナアナブルナトレッキング)

期間11月3日～11月17日

11月3日 快晴 BC(9:30)～ムール(13:30)

BCを去る日

15日間いたBCもいよいよ今日で終わる。BCの回りにはタルチョの旗がひらめいている。

11月に入ってこれまでのような快晴の日は少なく、風も出てきて寒く感じるようになった。

ポカルカンの登頂が早く済んで良かったと思っている。

ポカルカンBCほど眺めの良い所は少ないと思う、毎朝ヒムルンヒマールから朝日が昇りヒムルン、ネムジュンと私の好きな山が一望に見渡せる、また、キジ打ちに行き上を見上げると犬鷲が2羽ゆうゆうと飛揚しBCの分かれを惜しんでいるようだ。

シェルパ・ポーターは忙しくテントを畳んでいる、これまでキャラバンの10日、BC滞在15日間は長いようでもあり短いようでもあるが、とにかくこのBCからポカルカンの初登頂をなしとげたことに満足してBCを去れる。

馬5頭に隊荷を積み帰路キャラバン開始。

私のリュックにシェルパがネパールの旗を立てたので「なぜだ」と聞いたら「登山に成功したら旗を立てて帰るのが慣わしだ」とのこと、(まるで凱旋將軍みたいと笑った)

11月4日 晴れ ムール(8:10)～プーガオン(15:15)

途中ナル(野生の鹿)の群れが沢山見られた、また、犬鷲もポカルカンの上を飛揚していた。

プーの丘からネムジュンヒマールを偵察するため一人でプーの丘(5000m)に登る、

ここからはネムジュンヒマール、ヒムルンヒマールはすぐ目の前で登路の詳細がわかる

やはりヒムルンとネムジュンの間には200～300mのバットレスとなっており越えるのは

不可能だ、これでネムジュンの北側からの登路は途絶えた。

ヒムルンのベースキャンプ地もすぐ下に見えた、ここをベースに再来年くらいには登りたい。

プーの丘でネムジュン氷河を中心にスケッチした、ここは犬鷲の住家らしく糞や羽があった。

11月5日 快晴 プーガオン(9:45)～ナルガオン(4260m 18:55) 犬鷲4羽

プーガオンの入口で大きなトレッカー隊に会った(白人の男女10人)ガイドに聞いたらプー

ガオンへ行くとのことであった(後でカトマンズでの情報によるとイギリス隊とのこと)

今日私は馬上でのキャラバンでゆったりと山を眺めて下る。

ナルガオンへの分岐で本隊と分れ、ポーターのラクマンティと2人でナルガオンへ向う

ポーターのラクマンティと2人でナルガオンへ向かう、なんとなく本隊と分かれるのがなごり

おいしい、ナル分岐3600mからナル4260mまで約700mの高度差を登らなくてはならない

とうとう途中で暗くなってしまった、ナルには20年前に来たことがあるが、暗い道はわかり

にくく、やっとバツティを探し当て一夜を願う、ナルでは祭りらしく一晩中歌声が聞こえた。

ここまではいたるところにナル(野生の鹿)がいた。

11月6日 快晴 ナルガオン～カン・ラ(5322m 14:55)～ナガワ(3650m 17:50)

今日はいよいよカン・ラ越え、登り1000m、下り1600mと相当のアルパイトとなる

ナルからは緩やかではあるが行けども行けども長い登りが続く、カン・ラの所だけ雪が

深い踏み跡がある、また、カン・ラからの下りもいやになるほど長い、10時間かかり

今日も暗くなってしまった。

11月7日 曇り ナガワ(9:45)～マナン(3500m 13:30) 犬鷲2羽飛揚

昨日、一昨日と無理したので、今日はゆっくりマナンまでとした。

マナンには空港があり、取り付けの大きな道もできており、車も2～3台停まっていた。

マナンの街を見物したりゆっくりとくつろいだ。

11月8日 晴れ マナン(7:55)～トロンフェディ(4570m 16:20)

昨日とうって変わって良い天気だ、トレッカーも多い、トロンフェディに着きホテルを頼んだが

満員と言われた、なんとかチーフに頼み込んだところダイニングならよい、と言われダイニン

グで寝た。

ここで日本女性2名と会った、3人で来たが1名は高山病で一つ手前のヤクカルカで休養して

いるとのこと。

11月9日 晴れ トロンフェディ(4:25)～トロンパス(5416m 8:00)～ムクチナート(3800m 11:15)
昨夜はダイニングで寝たため3時に起こされた、仕方がないので早立ちすることにし、満天の星空の下ヘッドランプを頼りに登った、トレッカーも多く行列となった。トロンパスの近くで太陽が昇り暖かくなってきた、高山病になったような人も多くガイドが両方からささえて歩いていた。トロンパスには小屋があり馬も準備されていた。下り1600mはきつく特に下部が急峻で歩きにくい、尾根上にナールがないか注意して見たがいなかった。ムクチナートの寺院で暫く休憩、ここにはは5年前にも来たことがある。

11月10日 晴れ ムクチナート(8:10)～ジョムソン(2860m 13:00)
カリガンダキの河原は砂嵐で目が開けられない、サングラスを掛け顔にスカーフを巻いてしのいだ。ジョムソンでは久しぶりのホテル泊まりでシャワーを浴び、汚れは洗濯に出した。散髪屋へ行き散髪をしていると、スペイン人が来て「散髪100ルピーOK」と言うと「NO 200ルピー」と主人が答えた、それでスペイン人は行こうとしたら「100ルピーOK」私は費用の交渉もしないで髪染めまでした、費用は2000ルピー、えらい違いだと思った。私は旅行先での散髪を楽しみにしているので勉強になった。ジョムソンからポカラへはフライトを考えていたが、お金が少なくなったので歩くことにした。

11月11日 晴れ ジョムソン(8:20)～カロパニ(2650m 16:30) 犬鷲2羽飛揚
妻へ電話したところ、ポカルカン登頂の連絡はCOSMOからあったので関係者(工藤さん、本田さん、前田さん、吉松さん)連絡したとこのことで安心した。ツクテロッジ屋食したが、5年前にいた少女が綺麗な娘さんになっていた。

11月12日 曇り カロパニ(7:50)～タトパニ(1200m 16:30)
途中のガサでは桜の花が咲いて、セミも鳴いていた、高度が低くなると環境も変わってくる、夜にはクツワムシも鳴いていた。タトパニではホテルを探したが(全部当た)空きがない、1軒だけ4人部屋はあるがアベックなので本人へ了解が得られればOKとのこと、しぶしぶ了解してもらいやっと寝れた。タトパニの温泉に入ろうと覗いたら、白人の男女でいっぱい、ビールを片手にワイワイさわいでいたのであきらめた。

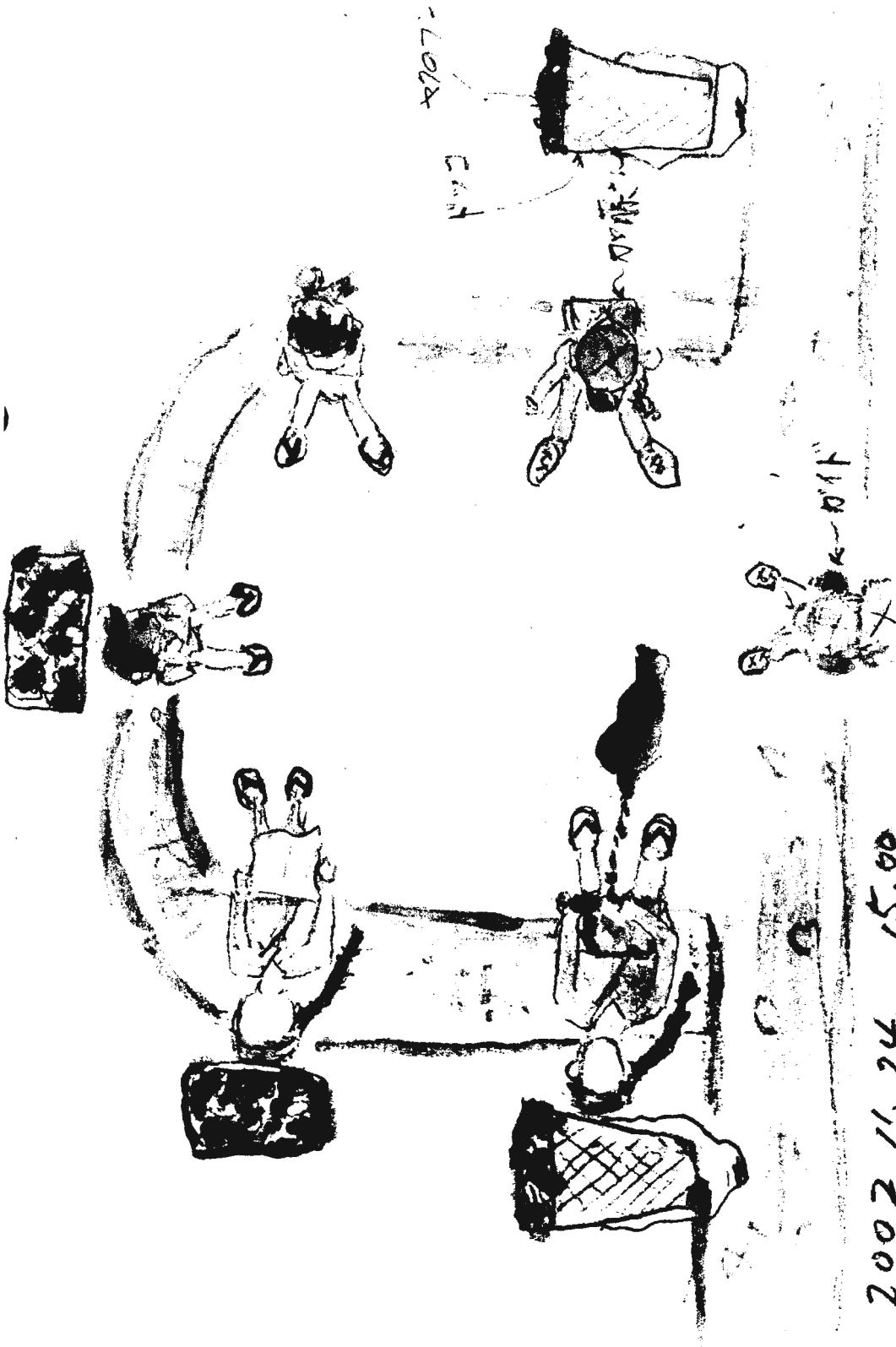
11月13日 晴れ タトパニ(7:50)～ベニ(1050m 15:50)
夜中に雨となり、顔の上に雨漏りで目が覚めた。ベニの近くは道路拡張工事でイメージダウンだ、1日中セミの声を聞きながら歩いた。ベニは大きな街であるがホテルが少なく4人相部屋でやっと泊まれた。

11月14日 晴れ ベニ(7:00)～バス～ポカラ(12:00)
狭いバスに半日揺られポカラに着いた(バス代200ルピーは安い)COSMOの大津さんへ下山の電話した。

11月17日
2日間ポカラで休養してカトマンズへ。

(11月18日～11月20日はカトマンズでポカルカン登山の後整理及びランタントレッキングの準備)

OSUWVZARREHITKIXVPRST



2002. 11. 24 15:00
 キャンジゴゴニハム帰途途中での出来事
 裏面を見よ // (11. 24の文)

(3)ランタントレッキング

期間11月21日～11月29日

- 11月21日 晴れ カトマンズ(7:00)～チャーターバスでシャブルベース(1600m 15:15)
ランシサ・リを登山する坂本さんのバスにガイドのビルと便乗した。
カトマンズから8時間のバスの旅、途中からランタンリルンが見えた。
シャブルベースは谷間で何も見えない。
- 11月22日 晴れ シャブルベース(7:40)～ラマカルカ(2600m 15:40)
チェックポストで3色のボールペンでサインしていたらボリスが「そのペンが欲しい」言うので
「これはやれない」と他のペンをあげた。(ねだりを感じた)
1日中樹木の中を沢の音を聞きながら歩く、ラマカルカは谷間で何も見えない
早く着いたので、岩の上の日溜りで本を読んだ。
- 11月23日 晴れ ラマカルカ(8:05)～ランタン(3540m 14:50)
森林の道もゴラタピラで切れ、視界が開けランタンリルンが見えてきた。
- 11月24日 晴れ ランタン(7:30)～キャンジンゴンパ(3900m 10:55)
早く着いたのでチエルクリ山の途中まで足慣らしに出かけ、ランタンリルンをスケッチした、
帰りの道で若い女の子4人がヤクの糞のドッコを置いて休んでいた、私達に休んでいけと手招
きしたので一緒に休んだ、「キャンデーはないか」と言うので「バムならある」、「3枚しかない
ので分けて食べる」と言って渡したら3人が口に入れてしまい、1人には渡らなかった。
「金のイヤリング素晴らしい」と誉めたら、私の腕時計と交換してくれと言う「時計は1つしか
ないのでだめ」と言ったら「ハロー、ハロー」と言うので見ると、座ったまま着物をまくりあげ
私に向けオシッコをチューと出したのでびっくりした、今でも何の意味かわからない。
- 11月25日 曇りのち晴れ キャンジンゴンパ(7:00)～チエルクリ山(5000m 12:00)
ヤラカルカ(4770m 13:00)～キャンジンゴンパ(16:00)
チエルクリ山に登り、帰りはヤラカルカへ回った、ヤラピーク登山のBCとして賑っていた。
ヤラからキャンジンゴンパの道は、なだらかではあるが相当長い。
- 11月26日 晴れ キャンジンゴンパ(7:55)～ランシサ・リBC(12:20～13:20)
～キャンジンゴンパ(17:05)
ランシサ・リのベースキャンプへ坂本さんを訪問、他に隊もいなく静か、途中でスケッチした
ランシサ・リの絵をプレゼントし、登頂を激励した。
キャンジンゴンパからはガンチェンボが良く見える、丁度モルゲンロートが綺麗なので写真
を撮ろうと構えたら、兵隊が前に立ち自分を撮れと言うので仕方なく撮ったら、住所をメモに
書いて送ってくれと言った(あつかましいと思ったが、後日送ってやった)
- 11月27日 晴れ キャンジンゴンパ(7:55)～ランタン(15:55)
今日でヒマールも見納めだ、ランタンへ下る、途中白いサルの子の群れを見た、綺麗な大きな
サルだ、ランタン谷では犬鷲を見かけなかったのもホテルのマスターに聞いたら「昔は
いたが最近はいなくなった」との返事、サルもいないし、動物が少なく淋しい。
ホテルでイギリスのMr. ジェムスとの話で、私：「イギリスは大英帝国以来下り坂だろう」
ジェムス：「今は経済を上向きにある、日本の経済は悪くなってきている、それは年功序列
高年者に高い賞金を払っているからだ、もっと若い人の賞金を上げると、若い人は金をどん
どん使うので経済も良くなる」と一本とられた、ジェムスは日本のある都市で英語教師を2年
やっており日本に詳しい。
往きと同じく岩の上で沢のせせらぎを聞きながら本を読んだ、周りにはモズが沢山いた。
ランタン谷に日が沈むのを見て夕食。
- 11月28日 晴れ ランタン(8:00)～シャブルベース(14:40)
沢沿いの森林に覆われ道を一路シャブルベースへ。
ホテルで韓国のトレッカーと話したが、マオイストの関係で3日間バスが出ていないで



2002.11.24 9:00 新井 五郎
新井 五郎

足止めをくったが、明日からは出るようだ。

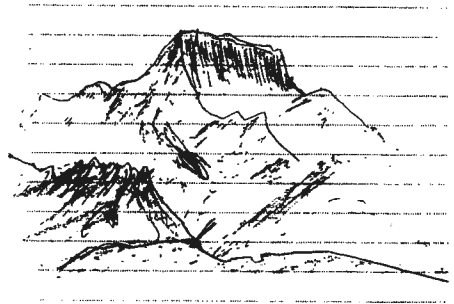
11月29日 晴れ シャブルペーシ(6:30)→バス→カトマンズ(15:20)
途中バスの窓からマオイストの襲撃で壊された警察署が見えた、
9時間の長いバスの旅で疲れた、バス代:2人で500ルピーおどろく程安い。
ガイドへ賃金を払い、ランタンの旅を終わった。

ランタントレッキングのまとめ

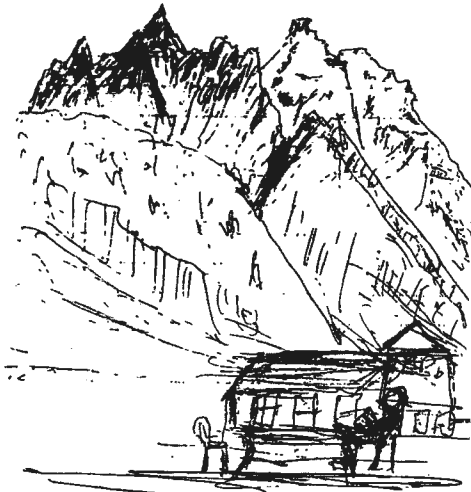
先輩から、ランタン谷はとても綺麗だと聞いていたので、どんな所か行って見ることにした。
一口に言って、日本の風景に似ている、違うところは回りの山が高い(6~7000m)ところ
今回エベレスト方面、アンナプルナ方面とトレッキングしたが、それぞれに良さがあった。
①エベレスト方面のゴツゴツした感じ②アンナプルナ方面の動物(犬、鷲、ナル)のいる牧歌的
な風景③ランタン谷の山河的風景
これで私の3カ月間の旅が終わった、思い出に残る楽しい旅であった。



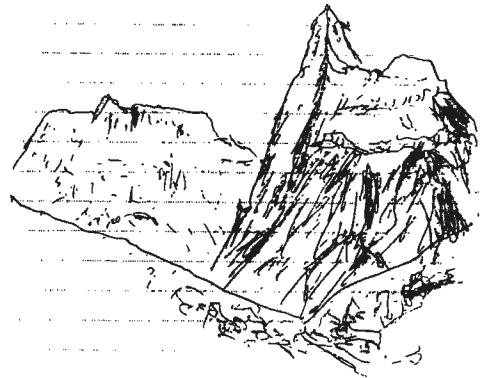
朝日峰 < アマダファル
本が、TIBET HOTEL の
河回音の山
2002. 11. 17. 7:00



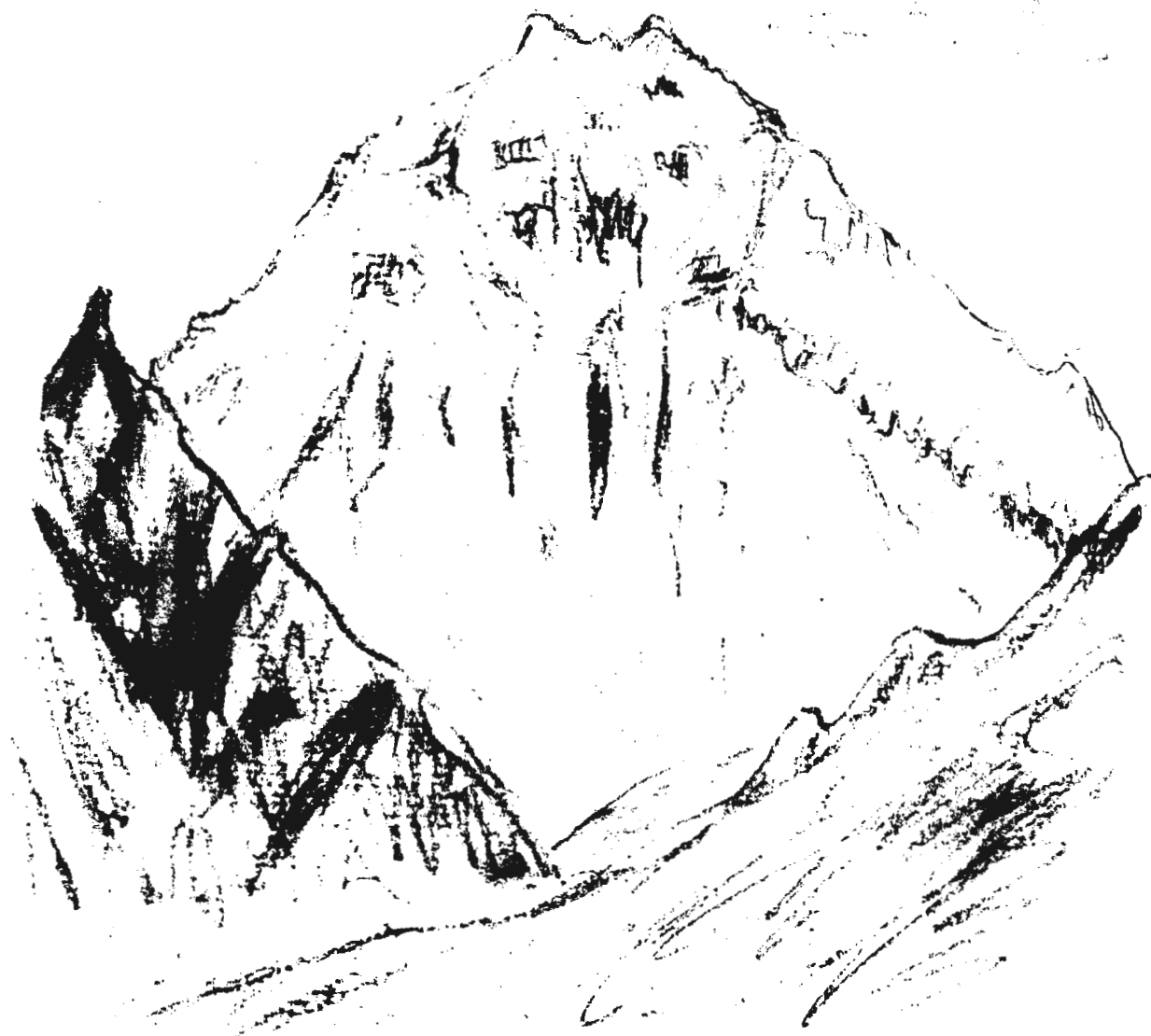
アムダファル
2002. 11. 17. 7:00
本が TIBET HOTEL



後ラチルン。
2002. 11. 24. 11:25
KYANGJEN GUMPA. NAGASTE HOTEL
フランス人の本を読んでいる。



2002. 11. 26 10:10
チルキルン (アムダファル)
TIBET HOTEL
アムダファル (チルキルン) の山



2002. 11. 24 14:55
フィリピン, フィルリ-への道(4200m)

私のネパール・ヒマラヤ山行

私は以前、2回程ヒマラヤへは行ってはいたが、退職してゆっくり時間が取れるようになったらまたヒマラヤへ行き、7000m級の易しい山に登りたいと夢みてきた、今年退職してその機会が来たので、今回のヒマラヤ行きを計画した。

計画を3つに分け、まず第1段階はエベレスト方面のトレッキングで高度順化を図り、第2段階でポカルカン登山を行い、時間が余ればランタントレッキングを行うこととした。

1. 期間 2002年9月11日～12月5日
2. 場所 ネパールヒマラヤ エベレスト方面 ポカルカン登山 ランタン方面
3. 参加者 加藤 功一
4. 経費 200万円
5. 行動記録

(1)エベレスト方面トレッキング

期間 9月15日～10月5日

①カラバタール方面

当初の計画ではカラバタールからエベレストを眺め、チョラパスを越えてゴーキョへ下る予定であったが、ナムチェで風邪を引き高度順化がうまくいかないので、途中ペリチェで引き返す結果となってしまった。

高度順化には細心の注意を払い、その日の宿泊地の高度より100m位高い所まで登り順化心掛けてきた、ペリチェ(4200m)でも100m高い所まで登り調整したが、食欲がなく夜は咳が出て呼吸がゼーゼーと鳴る、このままでは肺水腫になる判断し、カラバタール行きを断念しクムジュンまで下り休養を取ることにした。

②ゴーキョ方面

ゴーキョピークからチョユを眺め、レンジョパスを越えてチャーメに下る計画。クムジュンでの休養の結果、体調も良くなったのでゴーキョ方面のトレッキングを開始した。マツチャルモ当りではすっかり回復した。

モンズーンはまだ明け切らず曇りの日が多く山は時々しか見られない。ゴーキョピークは雲が立ち込め何も見えなかったが、今回は高度順化が目的のためガスの中を3時間で登った、途中から雪面となったが高度順化がすっかり出来ていたのできつさは感じなかった。

ゴーキョピーク(5360m)からはゴジュンパ氷河とチョユが一瞬見えた。レンジョパス(5345m)越えは、雪が深く膝までのラッセルで急峻なきびしいルートであったが、天気が良かったので目標を達成することが出来た。

これでトレッキングにおける高度順化がうまく出来たことで安心した。

③ガイド ペンバ・チェリンのこと

ペンバ・チェリンはCOSMO・TRECKのNO.1のサードで、ポカルカン登山で私と一緒に登るためCOSMO・TREKが指名してくれたシェルパで、これまでエベレストを初めアンナプルナ、ダウラギリ等17峰を登ったエキスパートである。

④トレッキングにおいては「花」、「野生動物」に感心を持って観察した。

花……種類の異なるものは全部写真に撮った(しかし、花期は9月で終わった)

動物……特に環境の尺度として、犬鷲(ギッド)、ナル(野生の鹿)に注意して観察した。

犬鷲はプーコラとアンナプルナ街道にはいたが、エベレスト・ランタンにはいなかった。

ナルはプーコラだけに見られた。

会員近況

5421 本田誠也

昨年は新日本山岳誌の分担原稿執筆収集に追われ、山登りは不作でした。

14回、13山に登りましたが、東北の出羽三山・蔵王・磐梯・西吾妻に行けたことは幸せでした。

新年の予定は「県境の山」の積残し3ルートをもとに3月までに歩くこと。7月に、電友アルコウ会特別例会として北海道大雪山（旭岳）に登る。9月に青森支部主管の第20回全国支部懇談会に出席し、十和田山に登る。他は1年をかけて「県境の山」をまとめたいと思っています。

皆さんのご協力をお願いします。

10185 神谷平吉

10186 神谷文子

昨年は、私も家内も体調をくずして40数回の山行は近くの低山（南阿蘇外輪山など）が主で、時々夏の休みなどに九重や由布へ足をのばす程度に終わりました。

今年1月2日は快晴に恵まれ、開闢岳に登りましたが、私は右膝、家内も左足が未だやられていて、とても大きい山へは登れそうにありません。何とか、山行だけは続けたいものと願っています。

9402 川上洋子

御無沙汰ばかりで、本当に申し訳ございません。川端先生がまた復籍されたと同じ、私ももう一度山行したいと願っていますが、下山が無理だと痛感

しました。昨年東北の美術館めぐりの旅で芭蕉の「山寺」を訪ねた時のことです。残念ですが、・・・それだけに岩橋崇至氏の写真展は心奪われる素晴らしい山を実際に体験した思いで会場に長く滞留してしまいました。槍・穂高など私も歩いたのに、あんな山肌の魅力を忘れかけていたのです。これからも、山の情報はお届けくださいますようお願いいたします。

9649 鶴田佐知子

一昨年の鳥海山の雪渓で少々膝緒を痛めたので、2002年は九州内の山や、ゆるやかな山行、塩の道や、熊野古道など歩きました。今年の計画はまだできていません。

10390 阿南誠志

阿南大吉・志武喜を入会させていただきたいと思っています。どんな手続きをしたらよいかお知らせ下さい。

※お二人のご子息の入会をさせたいとの希望がありました。新年度になり早速手続きを取ります。若い会員の入会は支部としても大変喜ばしいことです。

12909 永谷誠一

お陰様で元気で山を愉しんでおります。悲願であった脊稜山脈縦走（黒峰－小川岳－向坂山－三方山－国見山－五勇山－烏帽子岳－銚子笠）も予定通り歩くことができ、全国紙に紹介しようと思っています。今年3月にミルフォードトラック、7月に東北シリーズ3弾として秋田駒ヶ岳、岩手山、八幡平に親しみ、8月には孫を連れて荒川三山、赤石岳を楽しんできました。新年は東北シリーズ第4弾として安達太良山、西吾妻、磐梯山、を計画

し、8月夏山は、また孫連れで蝶ヶ岳、常念岳、燕岳と槍、穂高展望コースを歩いてきます。年末より居を清和村井無田に移し、地元の皆さんと山を通じ協力し合ってエコツーリズムを基として地域の発展に何らかのサポートができればと願っております。「山」12月号大蔵喜福氏の「これからの山岳会一考」は傾聴させられるものがあります。今年もよろしくご指導下さい。

8411 松本完爾

ご無沙汰しております。今年(14年)は茨城県のインターハイに出かけた後、富士山、穂高、槍へと1人旅を楽しみました。

1432 池崎浩一

今回も自治会業務と重なります。(新水前寺駅付近交通結節点改良工事設計概要説明会、午後7時から、水前寺共済会館にて)度毎に出席できず申し訳ありません。

11538 丸尾龍一

山へ行く機会も少なくなり、皆さんの話を聞くのを楽しみにしています。

10751 深堀弘泰

いつも出席できず、申し訳ありません。最近山行もほとんどなく、気力も体力も山への情熱が消え失せて、我ながら情けないと思っています。山へ向かわない人間が山岳会員としての資格がないと自らを恥じ入っている次第です。陰ながらのご盛会をお祈り申し上げます。

11856 太田章雄

今年は妻の体調不良及び私の病気などで、退職者アルコウ会の一部参加しかできずじまいでした。来年は私の体力の回復を待って活動を始めたいと思います。

8605 門脇愛子

近年は所謂登山は出来なくなり、里山程度の山歩きを月2回位楽しんでいきます。里山も良い仲間と花や樹木を探訪しながら歩くのも年相応でいいものです。でも、来年はせめてアルプスを眺められる旅行でもしたいと思っています。

12100 (京都支部) 能田 成

8月末に妻と共にモンブランに登頂しました。

4427 西沢健一

一昨年(01年3月)以来、治療を続けている膝の関節炎は少しづつ快方へ向かっていますが(医師の指示もあり)山行は目下控えています。皆さんのご活躍と朗報を期待しています。

11771 加藤功一・百合子

2002年の主な山行としては、7月に松岡夫妻、弟、明、石井さん、そして私共夫婦6名で、木曾の御嶽(3067m)と富士山に登りました。又、主人は永年あたためていたネパールヒマラヤへのトレッキングと登山を9月10日～12月6日まで約3ヶ月間出かけポカルカン峰(6346m)の初登頂という喜ばしい吉報をもって無事帰国致しました。元気な姿で帰ってきましたので

ホットしているところです。2003年の初登山は例年通り暮れから横浜の娘宅へ出かけ、新年を迎え、関東で唯一の百名山ひとつ、筑波山(877m)に登ってまいりました。千米にも満たない山ですが、真冬の山は雪が凍り、滑って何回も転びました。低くても厳しい山でした。

今後の2003年の登山計画として、1月・目丸山(雪踏み)、2月・上福根山(福寿草)、4月・屋久島(宮之浦岳)、4月末・夏木山(アケボノツツジ)、6月・九重山平治岳(ミヤマキリシマ)、6月・北海道(旭岳)、10月・ネパールヒマラヤトレッキング、11月・九重(黒岳紅葉)、12月・宝満山8忘年登山)を加藤グループで予定しています。(加藤百合子)

会友 松岡栄治
啓子

昨年の山行及び来年の計画は次の通りです。

2002年 1月 鞍岳・金峰山
2月 仰鳥帽子岳
3月 小岱山
4月 根子岳東峰、清栄山
5月 中国黄山、高岳・中岳
7月 木曾御嶽、富士山
10月 金峰山
11月 普賢岳
2003年 2月 ニュージーランドトレッキング(13日間)

4439 菅 隆雄

本年も引き続き、アミューズトラベル山旅(福岡発着)及び熊日旅行社計

画の本年スケジュールに従って、体力に見合った山歩きを予定しております。なお、年間30座を目標とし、別に金峰山、竜田山へは月4~5回を登ることとしております。

5120 (宮崎支部) 石井久夫

1月2日快晴。韓国岳に登ってきました。屋久島の全山が望見出来ました。勿論九州の、脊稜全山が見えました。皆様と逢えるのを楽しみにしています。

10422 藤本多加志

7月電友アルコウ会で旭岳に行く計画(太田さん企画)があるので参加を考えています。

会友 中根俊男

毎週日曜日には何処かの山に登ります。年末、年始にかけて四国八十八ヶ所を歩いて参りました。十九番札所まで行き、のこりは又、5月の連休にも行きたいと思っています。

会友 樋口 格・洋子

上下の歯の治療中で、長引く恐れも有り欠席致します。

川端浩文

JACに戻りましたものの、あまり山行はしていません。言い訳になりますが個人的、家庭的理由でハイキングが殆どでした。来年度はどうなるか、まだ身の回りの条件次第というところです。僕自身には特に問題はないのですが・・・。

会友 加藤 明

富士山、木曾御嶽山を含め15山登りました。今年も頑張りたいと思います。今年もよろしくお願いします

橋本岳範

来年は、今年以上に高校総体を充実させたいです。人吉高校山岳同好会も3年を経て、少しずつ成長しています。

会務報告

◇第1回支部委員会

(日時)平成14年4月6日(土)

(場所)熊本国際交流会館

(出席者)工藤、田上、広永、藤本、加藤
太田、本田 7名

(議題)支部総会提出議案の検討

◇日本山岳会平成14年度通常総会

支部長会議

(日時)平成14年5月18日(日)

(場所)東京都YMCAホテル

(出席者)工藤

124名出席、2720名委任

◇評議員会

(日時)平成14年4月20日(土)

(場所)東京都 日本山岳会ルーム

(出席者)本田

◇第4回新日本山岳誌編集委員会

(日時)平成14年6月15日(土)

(場所)東京都 日本山岳会ルーム

(出席者)本田

◇新入会会員(復活会員)

入会日付 4月22日

川端浩文

◇平林克敏氏(JAC常任評議員)

歓迎会

(日時)平成14年6月27~28日

(場所)熊本交通センターホテル・阿蘇

(参加者)工藤、本田、田上、松本、鶴田、
広永、藤本、池崎、丸尾、加藤夫妻
熊日経営セミナー講師として来さ
れた平林氏を迎えて歓談。翌日は
氏を案内して初夏の阿蘇路をドラ
イブ。

◇平成14年度支部総会

(日時)平成14年5月12日(日)

(場所)熊本市 九州電通労働会館

(出席者)工藤、西沢、本田、田上、川端
鶴田、広永、藤本、加藤、丸尾

太田、(会友)中村、石井、
中根、加藤、齋藤、浜崎 17名

(議題)・13年度事業報告、収支決算報
告、監査報告

・14年度事業計画、収支予算案

・役員改選 工藤 再任

神谷 重任

広永 重任

太田 再任

藤本 再任

◇夏期例会『ビールパーティー』

(日時)平成14年8月25日

(場所)熊本交通センターホテル

(参加者)工藤、神谷夫妻、菅、本田、田上
松本、広永、丸尾、中村恵、中根
加藤夫妻、石井文、松岡夫妻 16名

(議題)神谷氏制作のビデオ『春の屋久島
山行』、『傾山の春』、『冬の祖

母山メンノツラ谷』が放映された
9月からポカルカン峰の初登をめ
ざして遠征する加藤会員から登山
計画の発表があった。

◇奥野正玄名誉会員のお別れ会
(日時)平成14年9月16日(月)
(場所)熊本市 健軍ルーテル教会
(出席者)工藤、神谷、西沢、馬場猛夫妻
田上夫妻、門脇、広永、馬場博
中村恵 11名

◇第19回全国支部懇談会
(日時)平成14年9月21日～22日
(場所)広島県安芸の宮島 ホテルまこと
(参加者)工藤、本田、田上、鶴田、広永
(観覧)大塚会長はじめ全国から170名
が参加。21日はホテルでシンポ
ジウムと懇談会。翌日は弥山へ
登山。

◇『県境の山』補遺調査
(日時)平成14年11月3日(日)
(場所)下切山
(参加者)菅、石井久、田上、丸尾 4人
(観覧)宮崎ウエストーン祭に参加の後、未
踏査だった同区間を歩いた。なお
宮崎ウエストーン祭には本田、藤本
も電友アルコウ会の例会で参加。

◇『岩橋崇至山の世界写真展』
(日時)平成14年11月20日～26日
(場所)鶴屋デパート
熊本支部後援で開催された。延べ
入場者数6659名は写真展とし
ては同デパート開店以来の多い記
録となった。

◇平成14年度年次晩餐会・支部長会
(日時)平成14年12月7日(土)
(場所)東京都高輪プリンスホテル
(出席者)工藤、本田、広永
皇太子殿下は、高円宮の喪中で欠
席され、出席者もいつもより少なか
った。

◇平成15年新年晩餐会
(日時)平成15年1月14日(火)
(場所)交通センターホテル
(出席者)工藤、神谷夫妻、西沢、菅、
本田、田上、門脇、川端、川上、
鶴田、藤本、丸尾、加藤夫妻、
永谷、阿南(誠志・大吉・志武喜)
石井久、中村、中根、加藤明
松岡夫妻 25名
久しぶりに25名が出席し盛会とな
った。10月31日、ネパールヒマ
ラヤのポカルカン峰(6346m)初登に成
功した加藤会員の報告があった。ま
た、久しぶりに20代の入会希望者
である阿南会員の子息の紹介があっ
た。

◇評議員会
(日時)平成15年1月25日
(場所)東京都 日本山岳会ルーム
(出席者)本田

◇九州五支部合同会議
(日時)平成15年1月25日(土)
(場所)福岡市 平和楼
(出席者)工藤
各支部運営について。講演は松本前
支部長による『東チベットトレッキ
ング』のスライド。

◇支部委員会

(日時)平成15年2月6日(木)
(場所)熊本市国際交流会館
(出席者)工藤、神谷、本田、田上、鶴田
広永、加藤、藤本
(観覧)2004年全国支部懇談会準備

◇支部事務局担当者会議

(日時)平成15年2月15日～16日
(場所)東京グリーンホテル・山岳会ルーム
(出席者)田上
支部活動を語る。会員資格、会友制度

編集後記

- ・ 長年熊本支部報の編集・作製を一人で手掛けられていた前支部長の本田様のご苦勞を見兼ねて、この仕事をお引き受けしましたが、実際に係ってみて、本当の大変さが解りました。昨年10月頃から40肩(60肩?)が始まり、2月頃から右手が上がらなくなり、パソコンのキーボードをたたくとよけいに痛みが走るようになりました。整体やマッサージ、テープなどで治療しても快方に向かう様子もありません。誰もが一度はあじあう痛み、結局は時が治癒してくれる以外にないのでと諦め、知らぬ間に痛みが消えるのを待つことにしました。こんなよけいな苦勞をしながらできあがった熊本支部報ですが、多くの会員皆様のご投稿によりでき上がりました。ご協力有り難うございました。特に加藤会員には、昨年の秋の遠征で手にされたネパールヒマラヤでの初登頂が詳しく再現されています。お忙しい中でのご協力に感謝申し上げます。
- ・ 12月から1月にかけて広永会員も、南米大陸の最高峰アコンカグアに遠征しました。今回は勤務の多忙さから、ご報告は叶いませんでしたが、何かの機会に報告があるはずです。ご期待下さい。
- ・ 名誉会員だった奥野正玄様のご逝去は、私達にとって、とても悲しいことでしたが、お二人の追悼文を読みますと、奥野正玄様の生前のご活躍やお人柄が解ります。70年を超える永い間、山をひたすら愛し続けられ、山と共に人生を歩かれた奥野様の生き方に感動しました。もうこんな人の出現はないでしょう。
- ・ 荒尾市在住だった荒尾先生は、私が玉名高在任中、生徒とよく登っていた小岱山でよくお会いしていて、懐かしく思いました。幾度か生徒に小岱山の植物についてお話を戴いたこともありました。仙人風の白いあごひげ、学者の穏やかな語り口は今でも強く印象に残っております。ご冥福をお祈りします。
- ・ 2004年の全国支部懇談会、これまでに2回の準備会を開催しました。全国25支部の中で最小規模の支部で、会実施に携わるスタッフの不足も予想されますが、現会員の中で、何とか知恵と力を発揮して実施する以外にありません。それぞれの役員分担の中で、積極的な準備活動をお願いします。

また、適当な会員候補者がおられましたら是非、ご勧誘を試みて下さい。

(工藤)